家庭雜誌

第四拾九號

○咳嗽及風邪○は病の初候なり次に來るものは肺臟の衰弱にて身躰を憔悴せしめ最後に彼最恐るべき肺病の萠芽を顯出す彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコツト乳菓は能く咳嗽及風邪を豫防し肺臟を強くし活力を與ふる事實に驚くべし



世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を增し滋養分ある食料品として諸君に薦めます

此乳菓の洪大なる滋養分は嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すると實に偉にして且彼等は乳菓の滋味を喜ぶものなり

○賣捌所は全國到る所の藥舗にあれば就て御試用を乞ふ

橫濱廿八番
神戸十七番
米國貿易商會

○血液○は常に十分ありて且つ病毒なきを調合べきが本性なり貧血症なるものは唯滋養分なき血液より發るものにして瘰癧は即ち病毒の萠芽を顯すものなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコツト乳菓は能く血液を富まし且つ清潔にし又貧血瘰癧其他凡て血液より發る諸症を豫防し凡て身躰を養ふに必要なる血液を造るものなり



世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を增し滋養分ある食料品として諸君に薦めます

筋肉の減少は滋養分欠乏の第一の徵候なり此の如き場合に於ては必ず此乳菓中に多く含む所のもの即ち衰乏たる精力を恢復し凡ての病症を豫防に必要なる成分を要するものなり

○賣捌所は全國到る所の藥舗にあれば就て御試用を乞ふ

橫濱廿八番
神戸十七番
米國貿易商會

竹越與三郎著

六版

支那論

定價拾錢　郵稅二錢

『大なる日本』を世界に建設すべしと說けるものは支那論也、
支那國民の侵略的山賊的特性を歷史的に說きて他日の一大憂患たるを說きて征清軍の氣焰を鼓したるものは支那論也、
『二十世紀の新權力平均』を說きて現今世界の權力平均を覆さんとするものは支那論也、
金貨を以て償金を取り弊政改革を斷ずべしと說けるは支那論也、
日佛露の三國同盟を主張して支那の後邊にある勢力と對抗すべきを說き世界的飛躍を說ける者は支那論也、
戰後の要償を歷擧して世人の注意を促せしもまた支那論也、
今や『大なる日本』『新權力の平均』『臺灣の占領』等、所論着々として實行せられ其他漸く天下の識認を蒙れり、
今後の戰局結收に近づきて外交の難局來らんとせるときまた一讀の價あるべし

●國民叢書　人物管見　定價十五錢　郵稅二錢

●國民叢書　青年と教育　定價十五錢　郵稅四錢

●國民叢書　靜思餘錄　定價十五錢　郵稅二錢

●國民叢書　文學斷片　定價十五錢　郵稅四錢

●國民叢書　天然と人　定價二十錢　郵稅四錢

發行所　東京京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

		郵税地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 有馬俊彦
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社
（本社電話番號七十番）

明治廿八年三月十日發行

家庭雜誌第四拾九號

目錄



家庭雜誌第四拾九號
（明治廿八年三月十日發兌）

社説

家庭に於ける賞罰の事

國家に於て然るが如く、家庭に於ても、賞罰は常に其二大柄として、一家の秩序を保ち、整理ある子女敎育をなすに、一日もなかるべからざるものたり。

然れども賞罰にして其所を得ざるものに至ては、賞勸むるに足らず、罰懲らすに足らず、却て勸懲の意に反對したる結果を生じ、寧ろ始より賞罰なきに如かざること往々これ有り。

過嚴なる家庭にねぢけたる子女を見、あまやかしの過ぎたる家庭に我儘なる子女を見るが如き、世人の共に唱説する所にあらずや。

家庭の賞罰に關して常に忘るべからざるは、賞罰を苟もせざることとなり。即ち意味なき賞罰を愼むべきこと是なり。餘りに多く賞すれば賞に慣れ、餘りに多く罰すれば罰を恐れざるに至り、屢恥ぢしむれば廉耻心を鈍くし、屢皷舞すれば遂に大抵の事にては皷舞せられざるに至るべし。故に賞するには必ず賞すべき行爲ありて之を賞し、罰するには必ず罰すべきの事實ありて之を罰すべきと共に、罰すべき事實あらば必ず罰して甲の時に罰して乙の時に宥す如きことあるべからず。賞すべき行爲あらば必ず賞して甲の時に賞して乙の時に賞せざる如きことあるべからず。賞罰に常なければ信ぜられざるなり、信ぜられざれば賞勸むるに足らず罰懲らすに足らざるべし。

又常に其賞すべき行爲若くは罰すべき事實の輕重を量り、同じ時は、之か賞罰の輕重も同じくすべく、重き

時は重かるべく、輕き時は輕かるべく、常に其行爲と賞罰との權衡を失はざるを要す。

世人往々に己れが喜怒を以て其子女を賞罰することあり、己れに喜ばしき事ある時は賞するに足らざることをも賞揚し、己れに快からざることある時は罰するに足らざることをも罰し、或は輕くすべき罰をも重くし、或は重くすべき賞をも輕くし、知らず識らずの間に信を其子女に失ふことと珍らしからず。

國家の賞罰は主ら報酬の意なることあれども、家庭の賞罰は如何なる場合に於ても勸懲の爲なることを忘るべからざるなり。從て其賞罰は成るべく數〻せざるを欲し、成るべく其有効なるを欲するものなれば、之を賞し之を罰する時には、必ず明に行爲と賞罰との關係を示し、以て十分に其賞せらるべく若くは罰せらるべき理由を了解せしめざるべからず。

若し人ありて一書を認め未だ發送するに及ばずして之を其机上に置きたりとせん乎。稚兒あり來て之を裂かんに、之を見付けて大喝せば如何。或は卒然走り來て其頭を撲ちたりとせば如何。

此の如き場合に於ける此くの如き刑罰は何等の意味をなすべきかを思へ。子女は啼かん。然れども其の啼くや大聲に驚きたるが爲めにあらざれば、撲たれたる頭の痛きが爲めのみ。彼等は唯一大暴力ありて之を虐げたるを知るの外、何物をも知る所なかるべし。勸懲の意安くにか在る。

若し極めて靜温に彼等を伴ひ、彼等が裂きたる書信を示し、其書信の何事を爲さんが爲めなるやを告げ、或は彼等が叔母に寄するものならん乎、其御身が常に慕へる田舍の叔母に送るものにして、叔母は此書によりて御身が如何に可愛くなりしかを知り、如何に御身の成長したるかを喜び、如何に御身を可愛き子なりといふべきか、又御身が今此書を破りたるにより、叔母は

御身が如何に成長せしや如何に御身が可愛くなりしやを知るよしなく、従て御身を可愛き子なりといふよしもなく、而して之を叔母に知らしめんには、母は美はしき御身の衣を截つべき手を止めて再び此くの如き長々しき音信を綴りなをさゞるべからずと語りたりとせよ。繰返し〱して最も温柔に之を語りたりとせよ。彼等稚くとも豈自ら其罪を知りて其既往を悔ひざらんや。

此くして非行に伴ふ刑罰の餘義なきを告げ、其罪を悪くんで其人を悪まざるの意を明し、母は御身を愛すること依然たれども、否寧ろ平時に優りたれども、罪は御身をして若干の苦痛を受けしむるに至りたることを語り、而して後に極めて輕く之を罰したりとせよ。例えば一指を擧げて彼等が小さき掌を彈きたりとせよ。彼等は則ち甚しく泣かん。然れども彼等は其痛きが爲に泣くにあらずして、己れが罪を悲みて泣かん。

是に於て乎、賞罰は始めて勸懲の意義あるべきのみ。」

賞罰は公平を主とし、公平は平安の心地より生ず。其子女を賞罰せんと欲する時は、須らく先づ自家心地の平安なりや否やを反省すべし。平安ならざれば暫く一言を發すること勿れ、而して其平安に復るを待て。喜怒は一時の事なれども、賞罰は永久に其印痕を子女の心地に留むべし。

科學

天地間の怪事（其三）

竹越竹代

有らゆる天地間の顯象に應用して、勢力の働きを論ぜんには、面白きこと猶ほ多くあれども、其途行き中々長がくして、一篇の冊子の盡くし得べくもあらざれば今ま一足飛に飛んで、本題なる勢力を手短じかく解釋

せんとす。

（九）勢力の種類

便宜により勢力を假りに左の如く種別せん。先づ第一は、顯はれたる『運動の勢力』也。此の中には例とへば諸遊星の運行、流星、彈丸、荒らし、流水、其他數ふれば盡ぎりもあらざれども、先づかゝる種類を含む。」第二は『顯はれたる位置の勢力』也。これは先きの紙上にも委わしく記るしたるが如とく、屋上の石、高所の水、雪の中に含くまれたる雨水、張りつめたる弓、時計のぜんまい等の如きを云ふ。

第三は、『隱れたる分子間の勢力』。即語を變て云へば、分子間の動搖より起る熱也。滊車の廻轉止まるに際し、車輪に熱の起るは、車輪の分子の運動によりて、熱の生ぜしものにして、即ち分子間の勢力と呼ぶ者也。

第四、分子分解の勢力也。こは第三の分子間の熱と甚だ相似たれども、分子間の熱は先づ分子が動きて後、熱の發するものを云ひ、之れは分子が熱を先づ受けて、爲めに分子と分子の間が膨脹し、運動を始むるの新勢力を云ふ。

第五は、『化學的親和力の上に於ける勢力』の働き也。化學的親和力と云ふものは、地球上にある引力と、同じ樣なる力を有すれども、引力は隔だゝりたる所にも働き、親和力は密接せる所にあらざれば働くを得ず、たとへば、引力により地球は遠き月を引き、地球は又た更らに隔だゝりたる太陽に引かる、近かく試驗せんとなれば、卓子の上に、少し相隔だてゝ水を滴らして見んに、甲の水は乙の水を引き、乙の水は甲の水を引き合いて見る間に、たん／＼相親かより、遂ひにその間一つとなるに至るべし。精密なる引力の法則を論ずれば、二のものは、一の物を引くに二倍の力ありなどゝ面倒なることもあれども、そは又た他日に讓ずり、こゝにはたゞ、引力と親和分との差をのみ解かんとす。

さて引力は、上に云へる如き遠方のものを引よする力を云へるが、親和力は、極めて相接近するにあらざれは相化合せざる力を云ふ。例とへば、炭素と酸素の如し。炭と酸は最も化合し易き性質を有するものなるが故に相合するに容易なる塲合に至たれば、即ち親和して、炭酸瓦斯と云ふ、一個特別の物と變化す。然れども炭素を以て成れる木炭は、酸素の多量に含くまれたる空氣の中にありて、少こしも親和せざるは何故ぞと云ふに、そは人の目にては、炭が密接に空氣の酸素に觸れつゝあるが如とく見ゆれども、實際は未だ親和する丈けに接近せざるによる也。今これに火力を與ふる時は、空氣と炭素が分解して初めて親和の定度に至たるが故に、相化合して飛散す。之を火とは云ふ也。この化學的引力は、『矢張位地の勢力』による者なり。

第六、茲に節短なからも一言を加へ置かざるべからざるは電氣也。電氣の働きは、種々なりと雖も、運動せる勢力の中に、その加わるべきは又た見逃すべからざる一事なり。

第七、射熱（ラヂエントイノルジー）のことなり。太陽と地球との間には、別に之れと云ふべき物體はなきに似たれども、奇態なるは、此の遠距離を僅づかに八分にして熱が傳たわり來ることとなり。こは目にこそ見へねイーセルと呼ぶ微分子の小なるものありて、中立ちわりて熱を導ちびくに由る。此かる種類のものを射熱と云ふ。

（十）勢力は何れより來るか

以上の長き説明により、勢力てふものゝ如何なるものなるかは、已でに明かに知り給へるなるべし。さてその勢力は元來何れより生れ出づるかは、讀む人々の胸中に凝まりて、未まだ解けざる問題ならん。今少しくその疑問を解釋せん。勢力の原とは、第一薪炭、第二食物、第三高所の水、第四運動せる空氣、及び運動せる水等の中にあり。

（十一）　燃料の中にある勢力

遙かに彼處より一道の滊車、非常の速力を以て走り來たるを考へよ。中には數百數千の人々と、物品を載せて何の不自由もなく平然と走しれり。

人の力や、馬の力には、これ丈けの重もみなる車を引かんには幾百千の力を要するか、殆ど計り知れざるべし。何者かこの強よく且つ大なる力を發するやと尋ぬれば、滊罐なるは明かなり。さてその滊罐も中に水なければ、その用を爲さず。その水は又た石炭の熱力をかるにあらざれ滯の水とも、皿の水とも仝じく、何の働きをも爲さゞるべし。さらば石炭の力は實に強よきものにして、その中に含くまれたる勢力は、如何に大なるか、殆ど驚くに堪へたり。又た薪木が食物を料理して、人の榮養を供し、その食物により人が働きを爲すことは、靈妙不可思儀なるものあり。この不可思儀の働きを爲す勢力は、元と薪木の中にあるを思はゞ、石炭と薪木とは勢力の本尊かと云ふに然からず。石炭と云ひ、薪木と云ふも、まだ〳〵其の原に溯のぼりて考ふるときは、一個の種子、その種子は太陽の熱に由りて成長し、幹を出たし、葉を生じ、葉は又た太陽の光陰によりて、炭素と酸素とを分拆して、いよ〳〵成長して大木となりしものにあらずや。故に勢力の根原は、太陽の光陰にある也。

（十二）　食物

新聞は云へり某處に一人の老人倒れたり。身に纒ふはたゞ一枚の破衣、しかも膝は破ぶれて脛を顯らわし、頰は肉落ちて、殆んど骸骨計りなり。とは多少食物の欠乏のために倒ほれしものならんと、誰れもその談しを聞けは、死の原因は食物の不足によるものなるとに、同意せざるは勿かるべし。一日五十里を走しる馬は、神社に繫ながれたる御神馬の倍にも、三倍にも當たる食物を供せざれば、躰の勞疲を補ふ能はざるは、

馬丁も知り居る所なり。農夫が裁縫職人より多量に食し、車夫が學生より多くの食物を食するを見る人は、誰れも云わん、働く人程多量の食物を要するなりと。然らば人の躰に食物の必要なることは、滊車の滊罐に石炭の必要なるがごとく、これなしでは、遂に立つべからず。又た人が勞力を費やして、勞働を爲すや、その勢力の用ゆること多ければ、多き丈け食物をも又た多く取らざるべからず。されば人の勢力は食物にありやと云ふに、その食物も又た自ら生ぜしにあらずして、之れを育だてし太陽あること、先きの燃料を成長せしめし、太陽と相同じ。食物にも植物質のものと、動物質のものと、二種あれ共、植物は直接に太陽の光線に成長し、動物質の食物は牛又は豕が植物を食して成長したるを、人が受け次ぎし間接の働きに出づるの差あるのみ。故に食物の勢力も、また太陽の光線に由るとは云ふ也

（十三）　高所の水の勢力

高所の水も、燃料食物と相同じく、由來は全く太陽にあり、大洋の水、河の水、小くしては滯り水、手水鉢の水、硯の水、人の泪、何くれとなく太陽の熱のために蒸發せられ、蒸氣と爲りて上騰し一度は雲となり、又た一變して雨ともなり、雪ともなりて、地上に下るや、止まるに屈强なる凹所あらば、山上にも、岩の凹みにも等しく溜滯し、やがて流がれて瀧となり、小川となり、その勢力は米を搗き糸を紡むぐに至る。されば水車を働すの勢力、紡績を爲すの勢力は、水を上發せし太陽にあらずや。

（十四）　潮の勢力

潮の勢力に至たりては、少こしく相異なりたるものあり。人々の知る如とく、此の地球は晝夜絶へず廻轉せるが、これを妨げつゝ引き付くるものは、月なり。地球の全躰が、若し軟わらかきこと水飴の如とくなるとき

は、地球の全躰は、雲母のふわ〳〵と變形する如く、月に對する面が、更る〳〵膨くれて、日夜に絕へず變形すべけれども、幸ひ月の引力に從つて變形せんには地球が餘り固た過ぐるが故に、その變形は僅かに上皮なる水の部分にのみ。此變形こそ即ち潮の干滿なり。然れども若し地球が自轉することなくして、水が遠心力のために飛ばんとする傾むきなきときは、月の引力も、かく迄は潮を高かむるの力はあらざるべし。されば潮の勢力は、其の基くところ地球の自轉にありと云ふなり

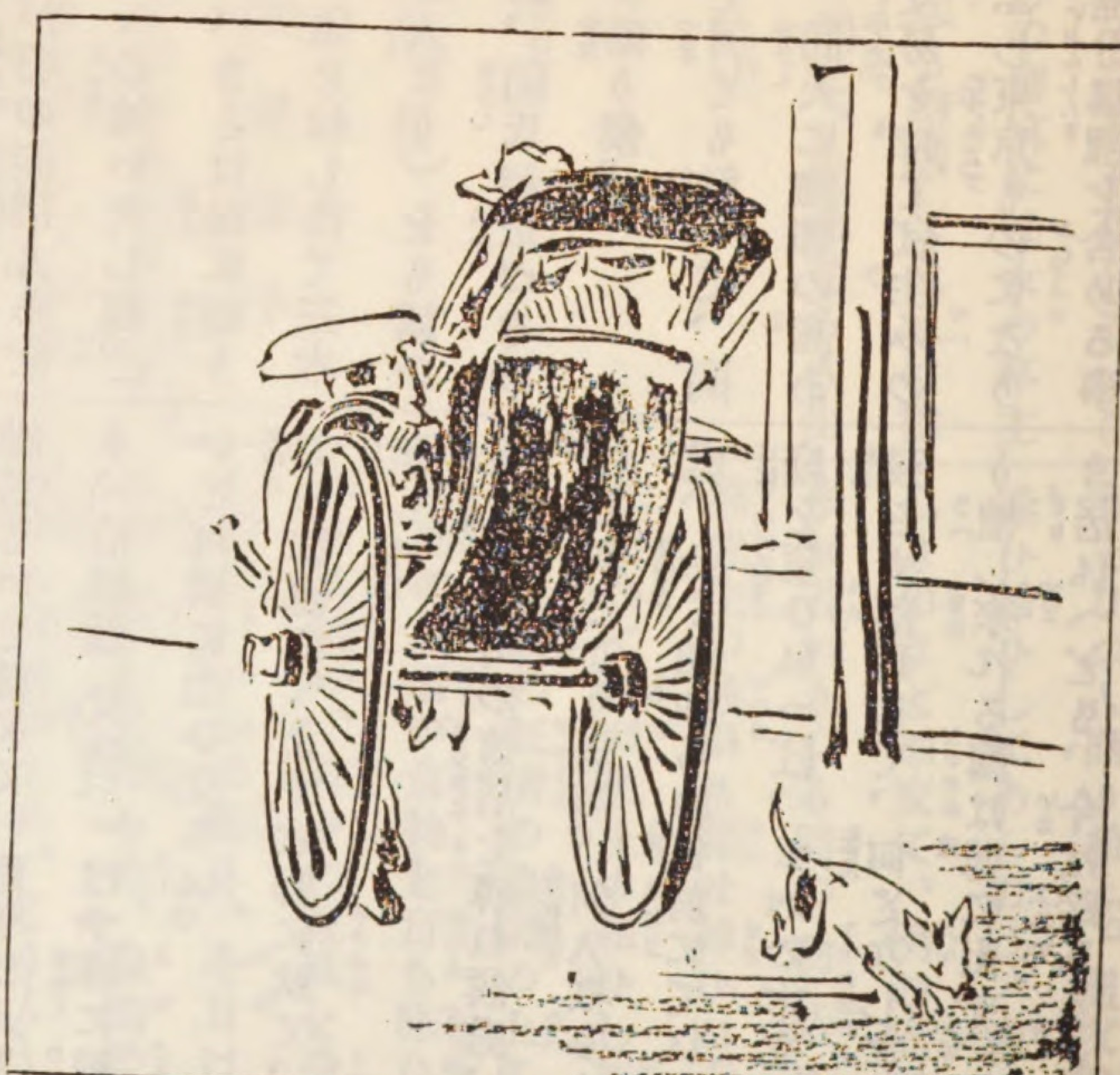
（十五）動ける空氣の勢力

以上は何づれも位地の勢力に屬くせるものなるが、勢力さま〴〵の働きを示めさんには、今一つの種類『運動せる勢力』のことをも一言せざるべからず。之は運動せる水と、空氣に由りて見るを得べし。それ等の勢力が、如何に大なる働きを爲すかは、云ふ迄もなかるべし。水は世界の文明の中かだちを爲す船と、その中の物品を載せて、他の方法にて達しも得べからざる、世界の彼處より、此處に至たり空氣は風車を動して、製造品を造くるのみならず。不潔の物質を彼處へ運びて、人生を幸福ならしむべき、掃除屋の働きを爲す。而してその勢力の原因は、と云はゞ、又た太陽の外ならざるを知るべき也。何故となれば太陽が空氣の一部分を熱して輕ろくし、蒸騰せしむる後を埋めんとして、寒たき空氣の來るにより、車を動すべき風は生ずるなり。太陽が一所に集まりたる水を蒸騰せしめて、雨となり雨は下りて各所に小川と泉を造くり、その水が大河に濺げる力により、小舟は下るべし。此くて大河の水は大洋に出で、そこに風波を起して荒れ廻ることは、洋海中の汚物を流がして、清潔となし、魚類の生育を助すけ、人類の繁殖を助すけんがため也。太陽の熱が勢力を作る又た大ならずや。

家郷への書信

湖處子

新橋より腕車を驅り、例の牛込の奥の古寺（家弟の寓居なり）に向つて芝、赤坂の市中を過ぎ候處、濠端の柳は冬枯れ、人通りも少なく見え候へば、成程大本營廣島に移されしよりは、都はかくも寂れたるかと感慨頻りに催しつゝ車夫に問へば、一向に去る事なく、此廣い東京に、大本營の二ッ三ッなくなつたりとて、鳥の立つたほどもなしと申し候、然して見れば氣の故なりしかと、思ひ返して見候へば、寂しく見えし市中の、忽ち又賑はしく相成候、成程お釋迦樣が穢土が其儘淨土と見ゆると云はれしも斯かる道理か知らんと思ひ及ぼし候時、思はず自から吹き出し候。



寺に着きて音なひ候へば、比丘尼御前出て來られ、二三言を交ゆる内、聲きゝつけしと見え、弟は奥の一間を走り出でゝ、迎へ候、隨分肥え滿ちたりし渠が我等を待ちつゝ、如何ばかり心を勞したりけん、その圓顔の面長に見ゆる迄頰落ちくぼみ、さながら色も青ざ

めたるには、痛く胸を撃たれ候。渠が喜の涙湛ふるを見るにつけても、我は刄にて刺さるゝ心地いたし候。」喜びは喰氣に伴ふものと見え、云ふべきことは後に讓りて、心は頻りに會食に急ぎ候へば、弟を拉し出て三木氏（不在中家弟の看護を委せし同郷人なり）をも誘ひ候に、同氏も幸ひ居合せ候ひしかば、同氏が近づきの料理屋に驅け上りて、且つ喫ひ且つ語り候。

御承知の如く、三木氏の大人は日を月とも數へて、同氏が歸郷を待たれ居候へば戯れに、同氏に歸郷の意ありや否を問ひ候處同氏も亦戯れに女房を持てば生みの親より女房の親が可愛くなり、折ふし東京ものになりたき心地すとうち笑ひ候、成る程隨分眞理を含める事と存ぜられ候、されど御心配下され間敷候、三木氏が歸休の計は漸くに熟し年を出でずして日夕倚門の情を慰さまるゝことゝ被存候。

歸る道にて三木氏の宅に立寄り、茶の馳走に預かり候。細君もいと健にて、靜子は見ちがふばかりに大きくなり「怡然敬二父執一」はや客に辭儀することを覺え、いといと可憐に生ひ立ち候。

其日は暮るゝまで故郷に就て、弟と語り、其夜も語り深し候。

翌日富久町の舊居を尋ね候處、懷しき家居も今は人の住む所となり居候。何人ならんと立ち寄つて門を見候處、全く相知らぬ名前にて候ひき。小路の門を入つて庭を窺ひ候へば、ヒバの木立は愈々榮え、柹の樹は葉殘らず落葉して、何となしに悲しみを添へ、去年野より植し來れる薄は穗に出で、昔の主を知り顔にうち招き居候へども、今は踏入るともならず、庭前の風物何一つ昔に變らぬ樣を見ても、坐ろに落涙に不堪候。

地上の天國とも期したりし一寰宇も、暫時の間に多く空屋を生じ屋主の一家は谷町に引越し、かの客翁すら其避難所なりし堅窖を出で去り居候樣子、事問はんと

思ふ、煎餅媼の家も戸さしありて、人氣なくいへば、バッタリ當惑仕、引返して裁縫師の宅を叩き、亦た樣子を尋ねし處、客翁は再度ピストル（其子のピストルを以て財産分配を逼るもの）に襲はれて落ゆき、宮武氏は此家（裁縫師）と子供の爭ひより不和を生じて、これも亦谷町に引越したる由、我等の舊寓には女の亭主にて、下宿などする樣見ゆ。高岡氏も歸國して、家は猶ほ明き居りし由、僅々たる半年の間に、短氣なる人生は、自分して、浦島太郎たらしめし。變らぬは煎餅媼のみにていひき。

樂しき夜かたり

藤島雪子

咋日今日風の御心地にて、少しすぐれさせ給はぬ母君を、高田なる祖父君のいたく案じさせ給ひて、今夜もいと寒きにふりはへて音つれ來給ひぬ。外に客人の君の來給ひゐて、此君も、母君の臥しゐ給へば如何ばかり徒然におはすらんとて、種々の書など携へて問ひ來給ひし所なりければ、共に母君の傍にて、火桶によりそひつゝ語り給ふ。祖父君も、客人の君には始めて逢ひ給ひしにあらねば、或はをかしき事、或はめづらしき事など取交て、例の隔てなく語らひ給ふ。中には、未だ若かりつる時の功話もいでぬ。大叔父君なる小楠先生の逸事も聞せ給ひぬ。さては維新の時長岡の君に從ひて江戸に上り給ひし折の事、上野の戰がたりより、此度の征清の皇師の上に物語は移りて、大山大將の君の捕虜の食物を自ら味ひ給ひし事、水雷艇に乘込める人達の、日々の荒風を凌ぎて、波凍る海上を往來しつゝ、いつの朝も、今日は寒しといふ事なく、今日は少し涼しと語る由、豫備後備に召されし家人の上など語り聞せ給ふに、とり〴〵に耳新らしく、或は勇ま

しう或はあはれに聞きゐたりき。又今日活けたりし室咲の櫻を、母君に見せまつらむと、枕がみに花瓶の置きてありしを見やり給ひて、彼處の枝はかくなす可し。此方のそへは志かせむぞよきと、いと細かくのたまふに、去年より習ひ初め侍りしにていと手づゝなるを、さらば明日よりは祖父君の許に行て習ひまゐらせんといへば、母君は例のわがまゝをとの給ひつゝ、いと心地よげに打笑み給ふ。志ばしありて、客人の君は、未だ家になすべき事あなればとて、いとま告げ給ふ。さらば珍らしくもあらねど、今日千葉なる人よりおこせし菓物のあるを家土產にと、母君のの給ふまに〳〵、紙に包みてさし出すを、祖父君見給ひて、さる紙の包み樣にてはあやふしとて、自ら包み直しなどし給ふに、又皆にて打笑ひぬ。やがて祖父君もいつよりも御氣色よくて歸り給ひぬ。いと〳〵賑はしかりしに、俄に靜かになり行て餘りに淋しければ、いつものごと何か面白き本など讀みて聞せまゐらせんと、今夜客人の君の持て來給ひつる中より、面白き樣なるを撰りなどしつゝ、春は今夜は如何に樂しく物語りてかあらむと云へば、さなり、久しく逢はぬ家の人々に、何くれと語らひをるならむとの給ふ。春とは、ことしにて三年が程、わが家に仕へしはしためなりしが、今朝暇を乞ひてかつしか村なる家に歸りしなりけり。今夜は彼人の高き笑ひ聲の聞えねば、何となくさう〳〵しやと、彼方にて物縫へるはしためらがはるの事を語る聲ほの聞ゆ。今はやう〳〵話も盡きて、此度は、此頃大坂にいませる父君の御許より、今日の晝つ方來し御書を取り出で、又くり返し小さき聲にて讀む。春とは云へど猶さえかへる風寒き此頃を、旅宿につゝがなくておはする事、かねて歸さにはと願ひまゐらせしもの調へんと、西陣の織物賣る家に趣きまして、母君のと我がのと、帶二すぢを求め給ひし事、又わが送りまゐらせし雜誌を讀

みまして、なほよくいそしめよといと懇ろに記し給へるを見れば、御情いとゞ身にしみて覺ゆ。猶幾度となく口の中にて讀みつゞけゐたるに、母君は先の程より父君の許に出し給ふ書を、臥しながら書きゐまして、袋に入れ給ひつゝ、切手あらばとの給ふに、急ぎ立ちてこゝかしこさぐり求めてまゐらせぬ。いつしか夜は更けぬらん、暗うなり行く燈火をかきたてつゝ、明日の課業の歌の未だ出て來ぬを如何にせんと、獨りごちゐたるに、母君の、雪よ〳〵と呼び給ひながら、面白きもの見せん、之れを見よと出し給ふを見れば、紙のはしに、

窓の戸もいまだ開かぬ朝庭に
　聲なつかしく鶯のなく

とあり。母君の書き給へるなれば、打驚れつゝ、母君のいつ詠出給ひしにかといへば、今朝とく目覺めゐたるに、庭の竹村になく鶯の聲のをかしかりければ、ふと出きたるなり。歌といふものの詠みしは、あとにも先にもはじめてよと笑ひ給ふ。こはいとめでたく覺え侍るを、父君の許へ書きて送り給はゞときこゆるにかゝるもの、見せまゐらせなば、如何に笑ひ給ふ事ならんなどの給ふ。はしためらは、つとめて起き出るなれば、例のごと皆先に臥しぬらむ、あたりはいとゞ靜かになりまさりて、上野の鐘遠く響きつゝ、燈火も、すびつの火もかすかになりもて行き、池の蛙の聲のみいと高くきこゆ。

少女の苦計

無一生

千六百八十五年頃は葉月の黄昏時エヂンボルグなるトルブースの監獄の狭隘き獄舍の裡に今しも會合なせる二人の男女ありサテモ此年古きトルブースの監獄は此

年の夏より秋に懸け不幸なる罪人を幽閉めしと夥多しくグラスマーケットの斬頭場へ時々幾多の罪囚を護送せり。

此二人の男女こそオキルトリーのサー、ジョン、コクレーン及び其女兒グリゼルなりコクレーンは其身が最後の日も近けば徐ろに死出の準備をなしつ坐ろに現在の名殘の惜まれて相互に諫めつ慰めつ果敢なき運命を喞つとは知られけり。

抑サー、ジョン、コクランは熱心なるホイッグ黨にしてアルヂールの暴動に主謀者の一人たりしがミユイルダイクスの一戰にロッス侯が軍に敗られ僅に殘れる部下の者を皆夫々に落し遣りつ其身も唯一人叔父なるクレーグミユイルのカビン、コクレーンの許を便りて少時躲れ居たりしが賴む樹蔭雨漏りてカビンの妻が告發に事露見に及び是非も縛目に恥しめられ白晝帽子も被らでエヂンボルグの町々を拘引れて遂にトルブースの獄舍に投れられつ裁判の言渡を俟ちたりし。

今日裁判の言渡ありてサー、ジョン、コクレーンは大逆罪なりとて死刑とこそは定められぬ。コノ夕ジョン、コクレーンは憂に重りたる頭を垂れて悄然と深く思ひに打沈めり今更に斯とは兼ての覺悟とて死する此身は露惜まねど吾身果敢なくなるなれば後に遺せし子供等は父には離れ家財は官に沒收せられて憐れ貧き孤兒の緣邊なき身となるならん就中憫然は一人の女兒なり今日か明日かと死期を俟つ賴み少なき境にも僅かに憂きを慰めしは可愛の娘……思ひ去り思ひ來れば流石勇氣のコクレーンも悲さ胸に迫り來つ果ては淚の一時雨時雨に濡れし枯野の尾花垂れし首は再び擡げん力なし。豫審中は最も獄則の嚴くして親族さへ容易に相見るとを得ざりしが今日裁判の言渡しありてよりは血屬は勿論朋友さへ自由に訪問るゝとを許されぬ遮莫コクレーンは我子等が敵黨原の讒誣にかゝり思はぬ罪科に

陥されんとの氣遣はしければ思ふ心を書き送りつ自個が處刑の前夜までは彼等が訪來ることを固く戒しめ諭しゝかば子供等は渾な柔順に嚴父が重き訓命を服膺けりサレド其の同胞グリゼルはカパカリの柔順を以て滿足せざりき。

死刑の言渡しありし次の夜コクレーンが深く思に悩める折しも戞々と鍵の音して獄舎の戸は開きぬ當下コクレーンは例の獄丁の來れるならんと俯向きしまゝ更に頭を擡げんともせざりしが頓て一雙の繊手は忽然コクレーンの頸を纒へり少女が軀は堅乎と父に傍縋りぬ。」

グリゼルは日毎に父の獄舎を訪問れたりしが熟々思ひ回せば倶に斯く相見んとも今宵を限りとなるともやと思ひは同じ父娘共に幽暗き獄窓の下に悄々と更け往く夜半の景色を瞻望つゝ互に出す言葉さへ涙の外はあらじ。

頁ありて少女は父に向ひ

アー使者のことに付イてはお望みの綱がムイますか情
願父上の眞實のお思召を言ふて下さいまし。

當時英王の師父にしてピエールと呼れたる貴僧在はしけり件の貴僧は英王の靈魂を支配するが如く又國政を執りけるがジヨン、コクレーンの父はコノ崇敬すべき貴僧に依りて吾子の助命を英王に哀願し奉らんものとて周旋しけり少女の言葉の中なる使者のことゝ云々とはコノことを指すなり閑話休題今は時日も已に迫りぬ死刑執行の命令が龍動より達せざる前に此勢權者に哀訴し得んとは迚も叶ふべきことにあらず去りとて他に施すべき策はなかりき。

何ンノ左樣なことが憑據に出來るものぞアルヂールも到頭三日以前に空しくなつたそうだ同時に殺された者も少ないことではないが此多數の者共は渾余に較れば罪も極めて輕き者況してや主謀者の一人たる余何んとして赦さるゝものぞ夫れに平生の怨恨霽すは此

時ぞと思へる敵黨の徒輩が只ノ一人も助命け置くべき譯もない。

辛くも繋ぎし賴の綱父の答に絕たれ又言ひ續かん言葉はなくてグリゼルは少刻呆然たりしが突然と。

噫、父上寂しうも在はさんが二三日が程お單獨でお居でなされて下さりますか。

思ひ設けぬ少女が言葉に父は吾娘を打凝視りしが何か按出し策略ありとは少女が擧動に依りて悟りければ抑彼は至孝なる資性、可愛や纖弱き少女の身でありながら斯る必死の境に莅み如何にもして父を苦難の中より拯はんとはなしつるかと吾娘が情の程を父は酌分て

ソレハ又何ぞ斯ウと思ふ仔細でも有ッてのとか?。

と問へば少女は言葉はなくて只首肯きぬ。

如何なる思付か知らないが今となつては何も無益何程思ッて見たところで成就やう筈がない。

否々親を思ふ娘の一念何の出來ぬとの御座りましやう

シテ誰ぞ助力する人でも有てのとか?。

否誰も御座りませぬ。

と言ひつゝ少女は蹶然起上りぬ希望を以て赫燿たる明眸宛然一個の丈夫の氣力を有てるが如き決心したる面色は此處常闇の獄舍の裡にもアリ〳〵と見認られぬ。

一身を賭しても此望みを叶へではとの和女の決心サレド幷は餘りの先不見先づ克く思ふても見たまへ譬へ人の袖に縋り何程憫みを乞へばとて其を憐れと思はん人こそ救ひもせめ承諾ひもせんなれども吾身を敵と思へる此世の中誰れか憐と思ふ人のあるべき。

少女は父の方に差寄りて懇ろに抱き擁へつ。

サナ宣まいぞ父上、不肖にこそあれ妾もコクレーンの娘で御坐り升。

翌日東天漸く白み世上の夢未だ破られざる頃グリゼル

は肥馬に跨り國境指してエヂンボルグを立出けるが此日グリゼルは故に下婢の如くに姿を窶しぬ去れば行く路すがら朝餐を求めんとて但ある旅亭に立入りしが去方の下婢にして借馬を雇ふてトウ井ド河の對岸なる英吉利河岸に住む母親許行く者とし言聞えて誰とて訝る者もなかりき日も早や正午に近き頃エヂンボルグの方を見返れば早や何處を夫れと白雲の雲井遙かに見ゆるのみ尚も前途を急ぎつゝ今日も終日夜に懸けて駒を早めて行く程に翌日漸くトウ井ド河を打渡りて事無く乳人が許に着きぬ乳人が家はトウ井ドの河岸にてベルヴ井ックを距ると凡そ一里餘の處にあり。

老婦は今しも入り來れる下婢を見るより太甚く打驚きオヤ〳〵マアお孃樣と叫びつゝ強く少女の頰に接吻しぬ。

少女は低聲にて。

妾は大急ぎで婆アヤに話し度イとがあつて來たのだが此處では話も出來ないから屋内に入りましやう。

老婆が忠實なるは兼て知れるものからグリゼルは吾が來りし事の次第を簡略に物語り且つ秘密さへ打明して且つ言へらく。

サア其飛脚は今はエヂンボルグへ下りの途中死刑執行の命令書は慥に革嚢の裡に相違ないソコデ妾は飛脚の男を引捕へ何ともして其命令書を奪取らねばならないシタが若しや成就しない曉には妾が一命は兎も角も父上の御大事。

ソレハ又何を仰つしやいます！　脚夫　申すは屈強の大の男熟練の騎者にて充分に武器の用意を致して居ります失禮ながら繊弱き姫御前の何として敵對がなりましやう。

去れば夫れにはと言ひつゝグリゼルは立て鞍の片端に結付け來りし一箇の包をヤオラ取下し裡より一對の短銃と男の乘馬用の外套とを取出して示しつ。

ソコデ妾の乳兄弟のドナルドの着類があれば貸してお呉れでないか元來瘦形の男であつたから妾に適ふであらう。

グリゼルが企てたる志望の次第を玆に一言せんに偖も脚夫が命令書を遞送せんとて倫敦を出發したるは已に八日以前のことにてありき去れば今グリゼルが其命令書を奪ひ取りなば—脚夫は再び倫敦に立歸り第二の命令は更に發せらるべし—十六日間は父の不幸の日を延ぶることを得べし都府倫敦にてコクレーンのために奔走なせるコクレーンの友人等は此延期の間に赦免を願ふに充分の餘裕あらんと思へばなり。

抑此企の成就し得んとは實に覺束なし去れどもグリゼルは親を思ふ子の一念何事かならざるべきと言へりサテモグリゼルは細密に脚夫が休息すべき場所は探り得しが玆にベルフヲールドより程遠からぬ地方に年老ひたる孀の營業なせる小さき旅亭ありチユルハムより郵便物を受取りたる脚夫は平常朝六時頃に此家に來り二三時間も憩ひし後再び發足するを常とせりグリゼルは此家こそ脚夫に相會せんに屈强の場所と決心なしければ時刻を測り忠實なる乳人に訣を告げてベルフヲルドを志して急ぎぬ軈て此家に到れば思ふに違はず脚夫は我より一時間も以前に着し居たりき此家には馬飼ふ人もなければ自から馬を劬はりつ手當も匆々に食室に入り飮食を命じければ老婆は出來りて。

郞君御食事でムイますか何卒卓子の端の方へお坐を願ひます其處ですと誠に勝手が好うムイますシタガ成り丈けお靜肅に願ひます睡眠んで居る仁がムイますから。

言はるゝが儘にグリゼルは今しも眠れる人の食事せしと覺しく食器杯狼藉せし側へに腰打掛けて老婆が持來し食事を二三嚙試みながら。

水を一杯お呉れ。

諾と返答も疾くには言はず老婆はサモ憎さげなる顔付にて。
旦那水でムイますか宿屋泣かせのお仁でムイますね。
左樣〳〵僕は酒が嫌ひで何處でも酒の代りに水を飲むのだが酒と同じ樣に水の代を拂ふのだ。
と聞て老婆は俄に笑を含み欣々と水の瓶をば持ち出つゝ。
ホンニ旦那は正直なお方ですとね。
グリゼルはコップ取上げ一口飲みて。
井戶は餘程遠方かね成らうとなら汲みたてを貰ひたいものだコレハ如何も微温くて不可ゴ苦勞だが汲んで來ては吳れまいか尤も是れも代を拂ふよ。
左樣でムイます餘程遠方でムイますが旦那のとですから汲んで來て差上げましやう夫れでは急いで往つて參りますから少時の間お待ち下さいまし夫れは左樣と其處に彼の男の短銃がムイますが觸ると大變ですよ二挺とも丸子が込めてありますそうなァー妾は見ると慄然と致します。
と言ひ捨てゝ老婆は水桶片手に出行きぬ。
老婆の後影見送りてグリゼルは拔足差足して脚夫が眠れる寢床の方へと進み寄りぬ空氣の流通を與へんとそが部屋の戶は少し開けてあり此處より漏れ來る鼾の聲は家内に響きて喧し去れども少女は足音させては彼が睡眠を覺さんかと思へば胸轟きぬ遮莫折も能くは革嚢を奪取らんものと戰く足を踏みしめつ顫ふ手先を差延べて戶を靜と半ば押開きつ室内を覗へば實にや脚夫は裡に橫はれり去れど彼の革嚢は彼の枕となり居りぬァー如何にして之を奪ふべき彼何として眼の覺めざるべきァナ便りなしとグリゼルは深く絶望の淵に沈み不幸なる命令書を藏めたる革嚢を凝視め居たりしが忽ち一計は心頭に浮び來りぬ。

グリゼルは再び卓子の方へと立戻り前に老婆が恐怖せし短銃を取上げつ込めし丸子をば手早く抜取り舊の位置に直し置き最沈着きたる風情にて元の坐に復し居たりき。

（つゞく）

舊友

筑峰女史

怠らず行かば千里の外も見ん浮世の人の身の上は神や知るらんよしあしの難波の里の梅か枝の遠き昔の香をまたひはる／＼こゝに古里をあとに見なして一すじに學びの道に入らんとて都のそらにとたどり來て塲所をも定めず迷ふ身の心のうちやいかならん想ひやられて憐れなりわらはは心地あしく久敷病の床にあり侍りしが漸く醫師のゆるしを得たりし故けふなん日もうらゝかなれば年賀の禮とて行く途中いといかめしき二頭の馬車に行逢ふさ中より一聲わか名を呼ぶ者ありきこはふしぎいかなる人にやあるらんと心もとめず行くあとより從者は跡追ひ來りよびとめぬまつまもほどなく馬車の中より洋裝したる婦人はいそぎ出てゝうや／＼しく禮をなすに驚ろきつゝもよく見るにこはそもいかに先年わらはが學校にありつるをり情をわかちしいとも親しき友なりき婦人は涙もよふして絕えて久敷この拜顏かはりいまさぬ有様にいと嬉しくは侍れとも幾年月を經ながらも音づれせざりし罪のいひわけいかにやせん海より深き惠の數々忘れんすべも朝な夕な音づれせまく思へとも心にまかせぬ旅の空かてゝ加へて憂き艱難一ぶ始終を語らまほしくは侍れとこゝは人の往來の多かり侍れば何とぞ我家に駕をまげたまへいざと勸めにもろ共に駒のあかきをはやめつゝ門内にこそ入りにけれ歸りをしらする一と聲にいそぎていてむかふ召使の案内につれて美麗なる坐敷へ通りて待つほとにやが

て主の婦人には衣服着かへて出で來りひたすら途中の無禮をわびつゝも眼には嬉しの涙をうかべ過ぎしとし君にわかれて一度は我がふる里に歸りしがきのふにかわるあすか川浮沈せも定めぬ習ひとてかそいろ共に世を去り給ひわらは獨りとなりし折も折とて亞米利加へと赴く人ありてその子供の世話する女子を求めらるゝと聞きしを幸ひ求めに應じ二人の子供を保育して彼の米國に打渡り種々の辛苦を物ともせず一心不亂忠實に立働きし甲斐ありて主人夫婦の愛顧を受け一年二年と過す内子供も追々成長し共に學校に通ひつゝ彼の國言葉をも覺えしかばおのれと勇む心より旅地の苦痛も薄らぎて夜るは子供の眠を待ち種々の學びの書物を研究し瞬時も無益に送らざりし爲めにや多少の智識を得てしかば折々は貴き人々とも交際するの便宜を得しのみか遂にある女學校にてをこかましくも和漢文學助教授の任を是非にと云ひつけらるゝに至りしかば遂に主人に許を請ひ重き任を引受けしも實に分外の幸福と倚ほ怠らず勵みしかば彼の國人は云ふも更なり在留の日の本人にも尊敬され何不足なく暮す内貴き勤めを申付かれる同胞紳士の妻となり夫の歸國ともろ共に此度歸朝し侍りしなり未だ日數も經ざるのみか所々と舊友を尋ぬれども其の居所さへも定かならず本意なき事と思ひつゞけ今日もけふとて所用を達して歸るさどこか見覺のある後ろ姿若しやと思ひ失禮をも顧みるひまもなく呼止め侍りし無しつけは舊友愛戀の情故と何卒御ゆるしあれかしと永き昔の物語りを聞けば想ひのいやまして先たつ涙をしとゝめ我が身の上は云ふも更なり他の舊友の或は結婚或は病死あるひは不幸に沈まるゝ一ぶ始終を打語りたがひに袖をしぼりつゝ夜もいといたくふけにければ再會を期しつゝも別れてこそは歸りけれ實に耐忍勉强は幸福立身の基とは兼て聞しが其のまるし今舊友の身の上に我か目前に見侍りては世の人々の

龜鑑にも記さでは止み難くかくなんものし侍るなり

家 政

家庭の教育

小兒の罪か母の罪か

世はだん〳〵賢しこくなれり。これにつれて起こる心配は、智慧を狡猾に用ちひて、人を害し、己れが腹をのみ肥やすが如とき人の殖へんことなり。たとへば便利なる器械は發明せられ、印刷業の如ときも、古への木版を彫るが如き不利にあらざるを幸ひとして、幾多の贋造紙幣の如きものは造くらるゝの危險あり。化學理學の盛かんに開らけ、鐵道の如とき、電信の如とき、重寶なる道具の使用せらるゝを幸ひとして、之れを用ちひて詐僞人殺を爲す大盜賊は起こるの恐れあり。人の生命を救くふべき強よき藥は、又た人を殺ろすに最も好く、人を守もるに最も力あるピストルは、惡人に用へしめばまた最惡の品也。

また何れの國にても勝利の戰爭の後には有りがちなることは、兵士の傲り、國民の高ぶり、それより引きて種々の惡事相續づき、或は飲酒に事業を怠るもの、亂醉にいさかひを起して大事に立ち至るもの、或は惡しき遊戯にふけりて、一生を過るなど、一々に算へ盡くすこと能わざれども、兎も角も善事に伴ふて、惡事の進み易すき時に當たり、家庭の主人たるものは德育の力を強よくして外より如何なる風の入り來るとも、家庭の城郭の破れざる樣に固ため置くこと肝要也。德育とは云ふ迄もなく、善を愛して斷行し、義務のためには、己を抑ひ、勤勉にして怠弱を誡ましめ、良心の聲を聞くの耳を鋭くして、一時の情慾の爲めに己れを欺き、己れに枉げざるが如とき用意を供なふるを云ふ。眞實の智育と云ふは、之より德育と相反するもの

にあらずして、善悪の區別を知り、德義心を強ふするものなれども、智育其法を過つときは、即ち危險之れに伴なふ也。

酒飲みが醉の醒めたるとき、昨夜の醉狂の樣を聞きては、ア丶悪しかりし、過まてり、再び飲むまじとは誰れも涙ながらに考ふる所なるが、さて翌晩となりて悪友の再び義理と甘言を以て誘ざのふに至たらば、今朝の悔は何にか去りて、再び情慾の奴隷となる。獨り飲酒のみならず、多くの場合に此る事少なからざるべし。」

大晦の儉約、處刑所の善心、何れも道德心には相違なけれども、か丶る道德は所謂眞の道德にあらずして、た丶一時の輕るき道德心のみ。眞の德育とは、誰れにも起りて、た丶ちに消ゆる霧の如き道義心をのみ致しゆるにあらず。之れを斷行して、已れを制し得る、強よき意思を養はしむるにあり。

さて如何にしてその斷行力を養しなわしむるかと云ふに、未だ道理の何にたるを解せざる小兒に向かつて、道理上これを説くは、愚なり。さらばとて道理の解かる迄成長するを待ちて、始じめて敎しゆるは已でに遲し。故に家庭の空氣を善に滿たしめ、父が大度忍耐の手本を顯らわさば、母は慈悲深かく、憐みあることを見せ、父が義務を重ずるの樣を顯わさば、母は勤勉の德を實際に吹き込む。これ最も法方のよろしきものなり。かくして敎しへ込みたる道德は、深かき心底に感情となりて植へ込まれ、ワシントンの梅の木の話の如とく、未だ小さき中より萬事眞心の命に負むかざる、美くしき性を習らうを得べし。

或る人親たしき友人の元に遊びに來たり嘆きて云へる樣、御身の如とき善良なる小供を持ち給ふ母は、如何に幸なるぞ。我家の息子は、生れ付きての悪性か、實に話なすも恥づかしき事のみ、日々我が目に觸る丶悲しさよ。未だ滿三才にもならざるに、已でに母に隱く

して食物等を盜すみ食ふの牲質あり、弄物等はちきに飽きて、一日も全じ物は持たず。猫にても、犬にても、酷ごき目に遇わしむるを好のみ。小鳥や蟬を捕へて飼ひをかば殺さずしては承知せず。そを止めんとするも母の命を用ず、虛言を吐きて氣短かく人を打つこと、惡口を云ふことは其の性となり、如何に之を制するも反て惡しくなるの心地せらる。如何にせばよからんか。實に前途思ひやられて悲しみに堪へずと。此かる母人は世に少からざるべし。

悲なしめる母人よ、目を小供より離なちて、己のが敎育法の如何を少しく考へ給まへ。御身は小供が未だ人をたゝくことを知らざる先きに、小供が過つて倒れ、自己にて頭を打ち啼きたるとき、云ひ給はざりしや。『ぼうや啼くのでないよ疊がわるいからぶつておやり』と。母人よ御身が世話したりしとき、御身は敎へ給わざりしや『此の棒で猫をぶつておやり』『もつとぶつておやり』と、又た云ひ給わずや『啼く兒は誰れだろうぼうではないようだ、啼く兒はあつちの子だ』と然して啼けるものは、實際その小供なるを知りつゝ、云ふにあらずや。今ま母人の困まれる原因を一々尋づね見よ。小供が惡しきか、已のれが惡しかりしか。忽ち判然するを得ん。殊とに叱かれば叱かる程、惡しくなると云ふは、當然のことなり。御身の小供は未だ滿三才に至らずと云ひ給へり。御身はその年齡が未だ惡過を嚴びしく咎がむるに餘まり少さ過ぐることを知り給わざるや。古しへより種々なる敎育家は說を爲して小供を徵罰すべき年齡のことを論ぜるが、何れもその餘りに早や過ぐるは、もへ出でんとする新芽の霜に傷むるが如とく、反て道德心の發達を害することを云へり。故にその懲罰の年齡の如ときは、敎育者によりて一定せざれども、當時敎育者間に最も歡迎せられつゝあるコンペーン氏は云ひける樣『二三才の幼兒が善惡を辨

別するの力ありとは、吾人の認むる能はざるなり。若し強ひて彼等に眞正なる德義を解するに適すると云ふことを信ぜんと欲せば、その德義心なるものは、極わめて不定にして、曖昧なる定義を納れざるべからず。云ひかゆれば道德心なるもの丶意味を不確實にし、又た稀薄にせざるべからず』と。故に未だ三才に足らざる小兒を、事々に八釜しく嚴びしく叱かることとは、分からぬまよひの路に入らしむる階のごとくなることは云わずして知れたることにあらずや。されば小供が少し考ふる力の出づる迄は、嚴しき中に柔らかさを加へ、善を爲すはつらきものにあらずして、悦びなることを知らしむを第一とす。それよりたん／＼發達して善の利益なること、義務なること、人の貴む所、人間の道なること等は、わかるに至るなり。故に小兒の時は或は歷史に、或は小說に、或は圖畫に、或は朋友に、何にかぎらず、其周圍のものを善ならしめて、見つ丶聞きつ丶爲す間に、種子は柔らかき心に植わり、知らず／＼善に至たる樣に導びくこそ肝要なり。朱に交じわれば惡しくなるてふ諺の如とく、惡に染まること易すき柔らかき心は、善に染むことも、又た早やきものなるは、母たる人々が常に心に留めて忘るべからざる事也。

小兒は母の鏡なるその中に惡しき影の顯はれたるときは、先づ顧りみて已れを見れば、その原因は彼にあらずして、已れにあるを見るを得ん。

化學の遊戯

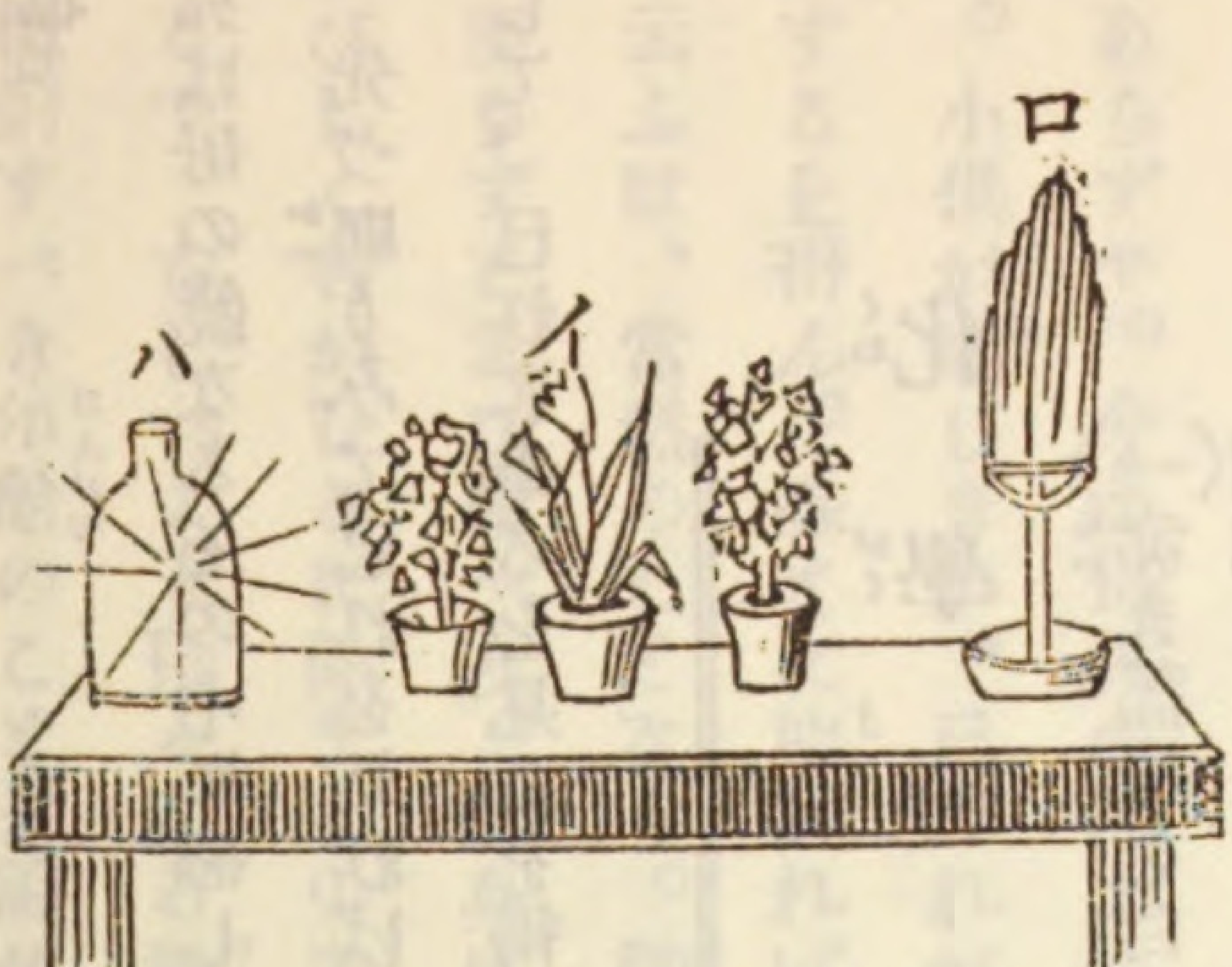
（一）赤き薔薇を白くする遊

こは手輕くして面白き遊びなり。赤かき薔薇を瓶の中に入れて、硫黃を燻ぶすときは、見る間に花の色白くなるべし。花は薔薇にかぎらず、蓮花、菊の花、何にて

も色を變ずるを得べしと雖も、もし誤つて仕損んずるときは、瓶の中に一種の酸を生ずべし。その酸は即ち硫酸と云ふ激藥にして有害のものなれば注意すべし。これにて藁帽子下駄の表等を洗ふときは、黒ろく見苦しきもの一變して、全く新らしきものとなる。但し三倍近かくの水を増すにあらざれば、餘りに激裂に過きて物を破るの恐れあり。

(二)怪物の如き一種の光

これを試むるには、第一は雨戸を堅たく閉ざして、光線の入らざる様に爲すか、然からざれば夜中なるを要す。入り用の道具は、一個の卓子の上に、花生け瓶、もしくは鉢植の花を二三個並ぶることゝ、メチールと云ふアルコール三合計りに鹽二オンスを加へたるものと、酸素の入りたる瓶と、燐の塊りとなり。さて用意の道具備われは圖の如とく花は卓子の中央に、『イ』の如く併列せしめ、アルコールに食鹽の合したる瓶を、能く振りまぜて、綿を其中にひたし、火を點じて口の所にある蠟燭たての上に置き、それと反對なる『ハ』の所には、酸素の瓶の中にて燐を燃すべし。その二たつの火がパチ〱ビカ〱と燃ゆる時、中央にある花を見るに、始め戸外の光線にて、何花と云ふどを見たる人にあらざれば、その奇なる色、奇なる様、恐ろしと云わんか、おかしと云わんか、殆と言語に絶するの様あるを見るべし。



(三)氷より火を出す遊

厚つき氷の一塊を取り、中央に小さき窪穴を作くり、水氣を拭ひ、その穴の中にボッターヌの一片を入るべし。火は立ち所に發して人を驚かしむべし。若しボッターヌを手に持てる間に、温まりをるか如きことあらば、發火の際、甚たしき音を發して爆發すべければ豫らかじめ用意して驚かざる樣にすべし。

食慾の談

春る先きは、最も食慾に變化のある時候也。食慾のまゝに腹を滿たし、減ずるまゝに之を癈するの利害を研究するは、不急にもあらざるべし。

(一)正しき食慾

人は母の胎を離るゝや、否や、敎へずして乳を求むるとを知れり。その本能は、長ずるに隨がひ、乳の代りに食物を求むるに至ると雖も、若し身躰健康にてあらんには、その食慾は正だしき一定の時間に起るべし。食慾の起こりし時は、人の身躰の中の燃料の盡きし時にして、これに新らしき燃料を與たへて、新らしき勢力を出だすべき時の來れるを計るの寒暖計なり。故に正當なる時間に食慾の出づることは、神の人類に給わりたる惠みの一つとして、喜んで謹んで、これに供給するときは、疾病は來らざれども、一時口腹の慾に勝つを得ずして、求めを越して、供求するときは、萬病これより起るに至るべし。食慾の減ずることは、即ち神がその分の器械を休すましめんと欲して、自然に敎しへ給ふ所の敎訓なれば、謹しんで之れに隨ふべし。然かれども食慾の減少は、即ち疾病を意味するが故に、そのまゝに捨て置くはよろしからず。

(二)食慾減少の原因と其養生法

急に食物の變化せるとき、運動の欠乏せしとき、胃の害せられたるとき、悪しき空氣を呼吸せしとき、飲酒

を過ごせしとき、其他凡べての方法により、胃腑に通常以外の事の起りたる時は、直ちに使者は腹より走せ來り、食慾減少の報を爲すべし。この時は、先づ其原因を考へて、過食せしものならば食をひかへ、食時不規則なりし時は、規則を定ため、固きものを食せるにあれば、これを改ため、凡べてその原因によりて改たむるが第一なれども、大低の場合に應用して、功能あるは運動也。運動は少しの醫藥よりも、反て通常の食慾減少には力ある醫師也。

（三）奇態なる食慾

姙娠の婦人が異なれるものを好のみ、未婚の少女にある萎黄病と云ふ一種の病氣にかゝるときは、通常ならぬものを欲しがるは、人々の知るが如し。或る人は、是等の徵候を指して、精神の狂ひによると云ふものもあれど、さにあらず。健全正氣なる人にして、屢ば〳〵土や、炭や、灰や、紙等を食する人さへあり。亞弗利加の土人は屢々塵を好んで食する者ありと云ふ。是等は、一種の病ひにして、味感に變狀を來たせるものなり。時に捨て置かば、癒ゆるともあれども、長く捨て置きて、その癖に隨ふ時は、身躰に益なくして害ある物を食するが故に、遂に健康を害することあり、これは醫師の診察を請はざるべからず。

（四）虫のために生ずる食慾

或は非常に甘まきものを好のみ、或は非常に酸きものを望ぞむことあり。こは屢々ある事にして、注意せざれば一種の虫の腹中に生ぜし證據なり。小供等には、屢ゝあり安すき病なるが、廻虫の生じたるときは、或る時は非常に食慾あり或る時は少しもなく、或は下腹部にシク〳〵とせる痛みあり、安眠出來ざるとあり。顏色青ざめ肛門ムヅ〳〵とするが如き感あるとによりて知るを得べし。蛔虫と思ふべき徵候の顯われたるときは、藥舗にて、セメンエンと云へる藥を求めて、

服用せば、激藥ならざるを以て、危險なくして大てい醫するを得べし。其分量は醫師にきくべし。

（五）食慾と人躰不足の食物

食物は口のために食するにあらずして、身躰の營養のためにするためなる以上は、正しき食慾が命ずる所ろを、靜かに聞き分けて、適當なる需用品を供すべし。人躰に必要なる食物と云へば、骨を養しなふもの、筋を養ふもの、或は肉、或は皮、凡てその部分〳〵によりて、費やす所を異にし、求むる所を異にし。化學上より人躰を組織せる原素をしらぶるときは、炭素、水素、酸素と窒素より成ると云ふ。故に薩摩芋や豆等の如き澱粉質を多量に含くみ、糖分に富みたる所謂炭素食物を多く食したる後は、さつはりしたる野菜物の中に、含める蛋白質の食物を欲しがるの傾き起り、已でに蛋白質に足れるときは更らに筋骨を養しなふべき燐素食物を求むるため、魚や牛肉の如き。動物質の食物を、自然に需要す。甘きもの丶後には辛らきもの、辛らきもの丶後には酸きものと、物に飽くは即ちその中にある養分の已に充分過ぐるの證なり。食物は成るべき丈け變化ある種類ある者を撰ぶべしと云へるは、之がためなり。

今ま通常の男子が、毎日食すべき食物の概略を擧げんに肉類は先づ一ポンドの四分の三（大凡そ九十匁）米や、麥も、其分量同前、芋類、豆類其の他の蔬菜は合せて一ポンドと二分の一（大凡そ百九十匁）バタの如き脂ら物及び砂糖は各々一オンスづ丶、茶及びコーヒー等は平均一日の量一オンスの半分を以て、最も適度とす、茲に云へる分量は、牛肉羊肉鳥の肉等を云へるものにして、魚を用ゆるときは蔬菜は少しく減じて可なり。

婦人は男子より少食するを通常とす、健康の度により一定せざれども、或る婦人は僅づかに男子の半を越へ

ざるあり。或るは男子の四分の三位のものもあり。

睡眠

睡眠の効は玆に改めて申すまでもなく、人が晝間の勞力も夜間の睡眠によりて回復せらる効蓋し莫大なり、されば睡眠といふ安息の事に就き詩にも歌にも好題目（西洋にて）と爲せるを屢々見たりき。

普通睡眠時間は八時間を以て定度と爲す、然れども我國にては古來勉强家と稱せらるゝものは子に伏し寅に起るを例とせり（則ち四時間）西洋にてもアレキサンドル、フヲン、ハムボルトと申す人は一夜の睡眠僅に四時間にてありたれども九十の高齢を保ちぬ、其他ハムボルトの如く睡眠時間を短減にしたるもの尠からざれども、必らず之に因て其天壽を縮めたるは疑ひゐるべからず、これ偏に睡眠は秘藥的藥よりも遥に優れる藥劑なるを忘却したる罪に座したるのみ。

之に反して朝九時乃至十時乃至十一時迄も床の內にゐるは勿論衛生に害ありと雖も、早寢せずして餘り早く朝起するも亦衛生に利あらず、通例夜九時に臥戸に入れば朝五時には臥床を離れ、又午後十時就眠なさば午前六時に起き八時間の安眠を爲すは最も上策なり、尤も此八時間の內には眞に睡眠に落ちるまで又は朝起の前三十分間位の睡らざる間あると知るべし。

而して朝起きる者は目の覺むると共に刎起きるは宜しからず、幾分間の心氣を靜穩にし後徐に起き出づるを要し、殊に小兒を寢床より驚起せしむるに至りては其害甚しく偶々可愛の小兒少女をして神經病を引起さしむ、又之と同樣睡氣のつかざる小兒等を強いて寢床に就かしむる勿れ、亓は兩方ともに慘酷にして衛生上有害あるものなり、注意を要す。

睡眠に就く前には床に就きて直ちに眠られ得るやうに

爽快なる讀者又は會話を爲せ、床に就かば重々しき夜衣を用ゆる勿れ、しかする時は血液の循環を妨げ或は魘夢を結ばしむるに至る、夜のものは我國にて冬は通常敷蒲團に夜着、小夜衣を備ふれど、西洋にては寢臺の上に藁蒲團を敷き、其上にフランケット、上に被るものは同じく「フランケット」二枚もかけ、寒を感すれば新聞紙を「フランケット」の間に置けば充分にして、寢室は常に空氣の流通を適宜にし、假令嚴寒の夜と雖も、窓の上部を二三寸開き置きて新鮮の空氣の入り來るやうにし、室内の空氣は六十五度以上に上らぬやうに煖室爐を焚き置くなり。

父母たるものは小兒の身體の異狀あるを知らず、叫び、怒りて刑罰の下に就かしむる思して強て小兒を寢床に送る勿れ、其は大なる父母の過失なり、後に至り其過失を悔ひざらんと欲さば豫め小兒に熱病、ヂフテリヤ、咽喉病にてはなきや否やを察せざるべからざるなり。

書物なき家庭（Bookless Homes）

吾人は人の家に至り、其家に意を注けば些少の物を見ても其主人の性質を判斷することを得べし、譬へば富豪の家に就きて花の美しきを見ば、必らず此家の主人は能き園丁を抱へ置くか又は近隣に栽培に精しき人あるを想像せん。

人は能々書物を急に求むる必要ある外は常に之を購買することを爲さざるもの多く、書物よりも他のものを求むるに汲々たり、若し資財豐かならざる人の家を問ひ、其人が高價ならざる敷物、珍奇ならざる家品を持つも、其書齋に於て書物を貯ふに於ては確に其主人の品位の高きを疑はず、併しながら書物は家品として造られたるものにあらず、況んや美麗なる家品なるをや、書物は窓なり、人の精神は此の窓より世界を見る事を得、書物なき家庭は宛も窓なき室の如し、故に曰く家

庭には價高き物品を以て修飾するよりも、寧ろ書物を整ふの優れるに如かず、人は或度まで書物を購求するは、高價の敷物を蹈み驕奢の倚子と大なる差あらば勿論なり、殊に小兒の如きは大抵書物によりて育てられ、而して智識を愛する希望は書物により、又書物によりて發達するものなり、小兒の心に此智識を愛するの希望ある時には、決して他の事情の爲に誘惑せらるゝことなきは蓋し讀書の德なり。

吾人は憫む、家に一冊の書物なき富人が此の世にあるを、今日書物の價の廉なることと彼等が煙草を燻らし麥酒を傾くる丈の費に於てすら年々幾多の書冊を集め得るにあらずや、斯くの如き最と易き事業を爲さゝるは愚の極と言はざるべからず、又雇はれ人又は勞働する人又は其他の人に於ても、讀書事業を好まば、貧なるとも一冊宛にても善良なる書物を購求し、且つ之を閲覽せよ、斯くの如くして年々增大する少さき圖書館は青年の歷史に於ける一個の名譽ある場所にして、書物を購求するは人たる責務なり、我家の圖書館は驕奢にあらず、實に人生須要の一部なりと知るべし。

手藝案內

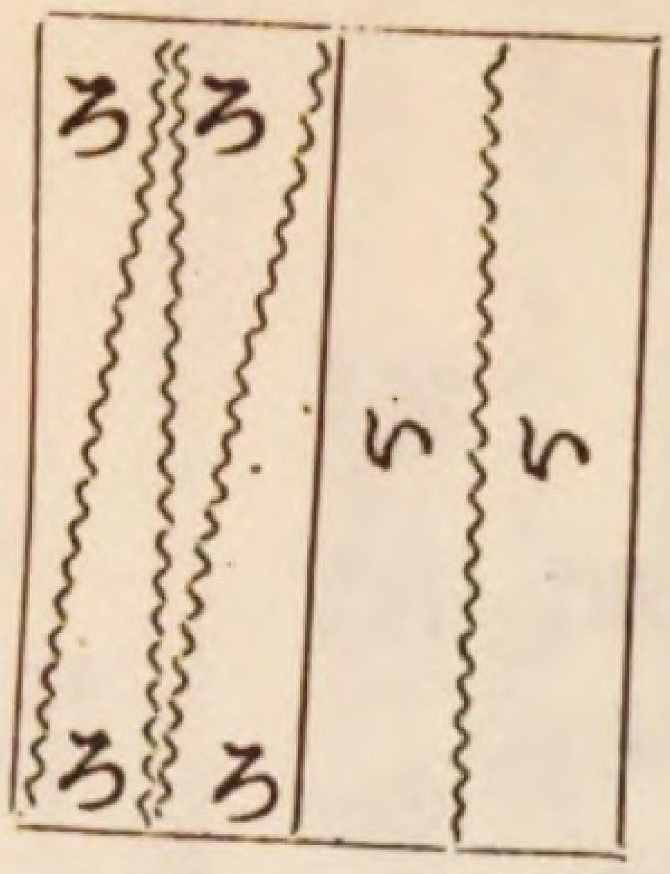
小兒のヅボン下

小兒のヅボン下と申しても其年齡によりて長短の差あれば、一概に仕立寸法を定むるを得ずと雖も其の仕立形に於ては大同小異なれば、玆には滿一年半より二年位までの小兒が着用すべきヅボン下を案內すべし。

扨普通ヅボン下と言へば其格好は日本在來の股引なれども、股引は腰の後部を縫はず開閉を自在にしあれど、ヅボン下は全く縫ひ閉ちあり、小兒には孰れが便なりと言へば、小兒の六七歲以上ともなればヅボン下を穿き居るとも自分にて便所に行て始末を能くすれども、未だ二三歲の嬰兒にては、なか／＼左樣に參らず、動

濕すれば大小便を取はづし、汚さるゝ毎に一々洗濯するは甚だ手數のかゝる事なり、又其手數のかゝるを避けんが爲め時間を計り大小便を爲さしむればヅボン下の汚さるゝ患なしと雖も、昨今の如き寒き時節に一々衣服をぬがせ紐を解くは倘々小兒に苦痛を感ぜしむる理なり、然らば小兒の足は何も着用せしめずして置くか、それも甚だ無慘なり、如かず腰部のみ股引に似たるヅボン下を製せんには、次に其裁縫の方法を示す。」

滿一年半位より二年半位迄のヅボン下を製するには、先づ「フランチル」又は紀州「チル」の如き大巾物（二尺巾）一尺三寸を取り八寸巾宛則ち圖に示せる通りなる



（い）の兩個を裁去る時は、二尺巾は殘り四寸巾となるべし、而して（い）の分は兩個の足を入るべき部にして、殘りとなりたる（ろ）四個の切は腰の部の「まち」となる分なり、之を衣服に比して別言すれば（い）の分は「身ごろ」となり、（ろ）は「おく身」となるものなり。

扨之を縫ふには（い）の兩片は別々は普通の縫方を用ゐ裾より四寸の所まで縫ひ行かば、コゝより（ろ）のまちを一つの身に二個宛縫ひ合はすへし（茲に注意す、（ろ）のまちの縫方は斜に裁ちたる方を縫ふと知れ）漸次に上に縫ひて兩足の分を出來なさば臀に當る所は其儘に爲し置きて針を用ゐず、股引の如く兩足の上部を疊みあはせて縫ひあはせ、此處に紐をつくれば、兩足の離るゝことなく、小兒に穿かせよき事妙なり。

用ゐらるべき布帛地は何が宜かるべきか、白地か何か淡色の本「フランチル」又は綿「フランチル」を用ゐなば温暖を保つことを俟たず又汚目の分り易きものなれば身體に密接する「シャツ」「ヅボン」下には隨一の品なり、其他木綿切但しは何か見當りて製するが宜し、一年以下の赤兒にも製作法は以上の如し、唯だ寸法と身

巾を狭くするに過ぎず。

社交一斑

流行の栞

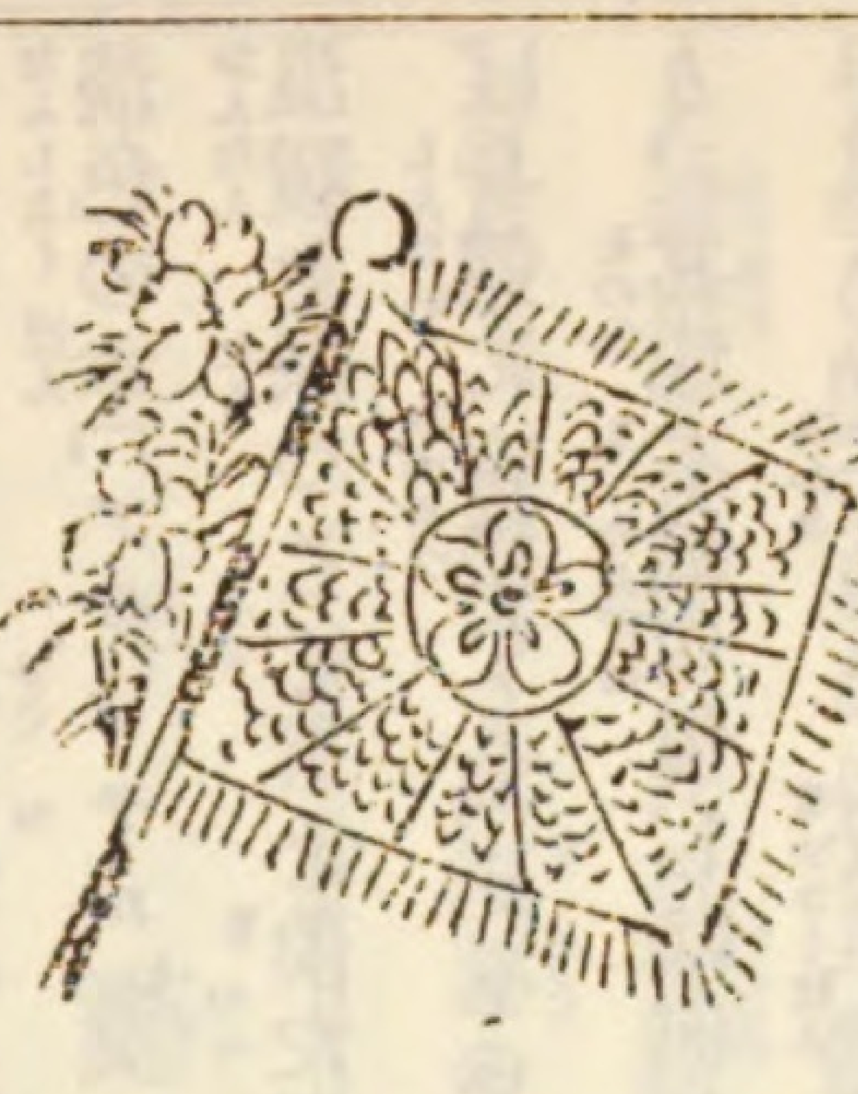
春夢

流行の花簪

「世の中にたへて櫻のなかりせば春の心はのどかならまし」といふ櫻の時候は正に近きにあらんとす、桐一葉落ちて天下の秋を知り、孤雁南に飛びて冬の至るを報ず、都下可憐なる兒童が頭上に挿む花簪は常に時候の魁を爲す。

今や彌生の月には入れど尚ほ肌寒に彼岸櫻の木々すら雪に蔽はれ、臘梅の花さへ枝頭にあれども、兒女の頭上には早や一重八重の櫻爛漫と花咲きぬ。

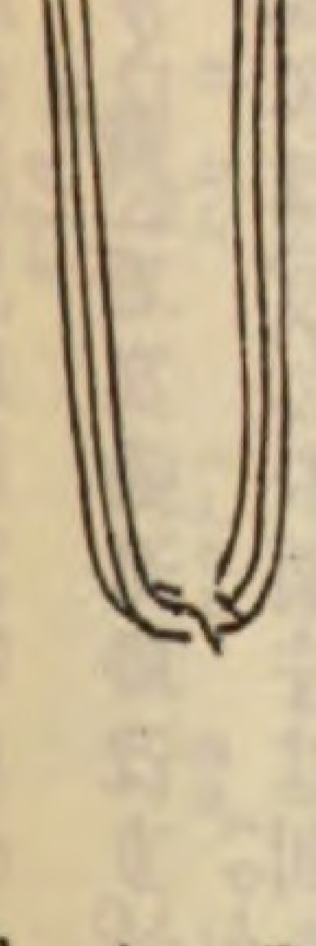
如何なる形が最流行を極むるかと言へば、相變らず日清戰爭の影響を受け居れども、近來中々に上品の流行品を見るに至れり、其中一際目に立ちて高尚にして美麗なるは、八重櫻に聯隊旗を翳したるもの、蓋し其意は日の本にて花の司なる旭日の櫻に大和武士の魂を寓したるもの歟、櫻の花は羽二重の所謂櫻色、聯隊旗は紅と白との縮緬の摘み細工な



れば間然する所なし、餘り美觀なれば寫して挿繪に置く、此外に金銀モールにて製作したるもの譬へば金モールの古代櫻に銀モールの花見船など風流極れり、矢張金銀モールの流行は以前より衰へず、日清戰爭によりて復活したるが如き傾あり、此外に櫻花の天眞爛漫たる所を能く細工し、流行の勢力あるものは大坂製のものなり、其製作眞に迫り感賞に堪ゆるもの少からず、之が爲めに美術にかけては敢て一籌を輸するを好まざる東京にても好んで大坂の製作品を歡迎するを以て、如何に大坂製櫻花の簪が東京巾幗社會に勢力あるかを證するに足れり、流行の花簪には尚ほ記すべきもの多けれど、畧しぬ、但し梅の花簪は最早遲れて眞實の梅花と共に影まばらになりぬ。

男帯止

男帯止には是迄專賣になりたるものあり、夫の高砂浦五郎が發明したるものも其一なるが、此頃追々見受くるは圖に示したるが如き帯止なり、これも專賣と



なりたるものにて、高砂のと差違ある點は、前者は帶を挿みて止むれどこれは挿みたる上にちよと引かけて止める工夫に出來し居るからには、之を使用して帶に破損の患なしといふ、記者は使用せざれば其善惡を斷言する能はず、暫く記して將來流行の盛否を卜す。

昨今市中に見るの

曲亭馬琴の或書物の序文に言へらく、智者は自適して流行を顧みず、庸者は常に流行を促ひて苦心すと聞き及べるが、此頃市中を通行する際に散見する所に依れば日清戰爭以來『朝鮮語教授』又は『支那語學研究所』なんどの看板路次の入口などに揭出し、一夜作りの朝鮮語學者支那語通を製造せんとし、殊に近來に至り我陸軍の測量家を募集するや、官報の出づるや否や、『實地測量教授』なんど書せる板白々、墨黑々の看板を見るに至る、『英數漢教授』但し當分の內無束修なんどゝ記せる看板正に顏色なからんとす、盜を捕へて繩をよると笑ふものもあらんが、却つて斯の如きものが速成の學術を得るやも知れず、之も一種の流行と思へば世の中はをかしきものなり、呵々。

謠曲の流行

風雅なれども卑野ならず古來我國最も高尚なる遊藝として行はれたる謠曲は近來頗る盛に流行し山の手邊の屋敷町には晝夜稽古の聲を絕たざる程にて今は立派なる貴顯紳士の中に家元もはだしといふ今名手と呼ばるゝ方々を舉ぐれば大審院撿事總長春木義彰、同院判事中村元嘉、宮內大臣秘書官櫻井能監、內藏助飯田巽、農科大學長松井直吉、貴族院議員南鄕茂光、森山茂、川田剛、澀谷一六、久米邦武、西岡逾明、刀圭家には濱田玄達、伊澤信平等の諸氏を首とし三井一家、小安峻等の諸氏は皆此藝の達人にて其外中村道太氏が全盛を極めし頃寶生九郎に月給十五圓づゝを給して自家に聘したる如き又文學博士小中村淸矩氏が家元の某を自家に聘したるも謠曲の稽古中其文句が文格に合はざる處ありとて師匠とアベコベに文章論の講義を始め之が爲に師匠は閉口して出稽古を斷りしなどの奇談もありて兎に角謠曲流行の盛なるは周く人の知る所なるが今其現存家元として教授を業とする者を聞くに觀世、寶生、金春、金剛、喜多の五流に分れ觀世流には觀世淸廉、觀世鐵之丞、梅若實、梅若六郎、梅若萬三郎、山本金之助、梅若近右衛門等、寶生流には寶生九郎、松本金太郎、命尾與作、命尾壽作、巳野巳松、波吉甚次郎、矢田八太郎等、金春流には金春平成、櫻間伴作等、金剛流には家元の金剛鐵之助は方今京都に轉居して居らざるも其門人金剛氏重、寺田左門治等喜多流には喜多六平太、野添某等にて皆門を張りて

業を授け其門に入る者少なきも數十名より多きは數百名に上り此等の門人は皆五十錢乃至三圓の月謝を收め毎週二度位通ふものにて其稽古は當初一回に二枚位より始めて漸次三四枚に上り當初一二ヶ月の間は聲曲未だ調を爲さず隨て他人に聞かるゝを恥るも稍ゝ二三番の謠曲を諳んずれば忽ち大天狗と爲り夜な〳〵近所の迷惑を憚らずして高調に謠ひ若し來客あるときは特に御馳走して聞て貰ふ程となるものあれども右に述べたる先生達は最早黑人の境に達したるものなりと聞く

一種のパイプ

當時廣島にある内務官吏は公務に忙はしき暇々に假官舍の裏手にある桑の樹を切り取り皮を剝ぎ心をくりて見事素人細工のパイプ出來上りければ同僚我も〳〵と之に倣ひ琥珀も象牙もはだしといふ勢なれば武官も此流行に感染し廣島の喫烟社會の大持となり追々東京にも此流行蔓延の模樣ありと聞く

日用品物價（三月五日）

⊙白米小賣相場（一圓に付）　一等白米八升●二升等白米八升三合●三等白米八升七合●四等白米九升●五等白米九升四合

⊙西洋食料品（四ダースに付）　島印ミルク十六圓七十錢●人形印ミルク十一圓九十錢●子ストミルク十一圓七十錢●和製ミルク九圓八十錢乃九圓（一ダースに付）　●食鹽二圓四十錢●和製食鹽一圓七十五錢●カラシ粉二圓七十錢●和製カラシ一圓九十錢（一斤に付）　●紫牛印バタ五十錢●地球印バタ五十五錢●同半斤に付三十錢（一打に付）　●ビスケット一斤入四圓●同次三圓五十錢（六ダースに付）　●胡椒粉十二圓八十錢●同罎八圓五十圓●ソース九圓二十錢（一打に付）　●イスポアタ鑵入四圓八十錢同小鑵入二圓九十錢（二チンス入）　●ビフエキスリビック八圓二十錢●コダヒー六圓

⊙陶器類　陶器好の家庭の爲め現今の大相塲を擧ぐ（百個に付）▲肥前燒の部（百枚に付）　●薄用尺皿十圓●同尺一十四圓●同尺二十八圓●同尺三廿七圓●同尺四三十一圓●同尺五三十七圓●同尺八百三十圓●同二尺百五十圓●同角尺皿十二圓●同角尺一十四圓●同角尺二十八圓●同角尺三二十七圓●薄用生盛二圓四十錢●大曹生盛二圓二十五錢●薄用平中盞付二圓六十四錢●同平木同三圓六十錢●同平小同二圓四十錢●同丸小同二圓四十錢●同丸中同三圓二十錢●同用丸木同四圓十錢●同丸毛料同五圓十錢●薄用小皿一圓七十錢●同三寸巿五圓二十錢●同三五七圓●同四寸九圓●同五寸十七圓●薄川形入千代口一圓七十錢●三五火入四圓●五寸火入九圓●六寸火入十五圓▲尾張燒の部（百個に付）　●銅判二寸角重三圓七十錢●同二五五圓十錢●同三寸六圓五十錢●同三五三十圓●同四寸十八圓●背地手遊小丼一圓九十錢●同中丼二圓七十錢●同大丼五圓廿錢●背地花五寸盃二圓七十錢●同五五皿四圓十錢●同六寸皿五圓●本同判五寸皿三圓六十錢●同六寸皿五圓十錢●背地尺植木八十圓●ルリ尺植木百圓●草花尺植木七十五圓●背地六寸植木十九圓●ルリ六寸植木二十二圓●ルリ尺五植木五百圓●背地尺五植木四百八十圓●草花尺五植木四百八十圓（百組に付）　●背地便植四百圓●草花便植四百五十圓（百本に

付）●青地證便二百五十圓●草花證便二百八十圓（壹付百個に付）●草花平小五十圓●同平中七十五圓●同平木三百圓▲淡州の部（百個に付）●黄稲小頭十五圓五十錢●同中頭二十圓五十錢●鷲甲稲小頭廿三圓五十錢●同中頭三十三圓五拾錢●黄砂糖韭十五圓五十錢●同小さト一圓五十錢●同小々さト一圓五十錢●中さト一圓四十錢●同小判皿一圓五十五錢

⦿雜穀　南京白大豆一斗八升五合●同青大豆一斗八升五合●同澁色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗五升●八戸大豆一斗八升●粕壁澁色大豆一斗四升五合●日無白さ一斗二升●本石大豆一斗八升●南部大豆一斗八升二合●越後大豆一斗五升五合●窒蘭黒豆二斗

⦿鹽　●赤穂三俵八分五厘●大鹽并に八家四俵●本齋五俵八分●新齋六俵八分五厘

⦿種油　●胡麻十一圓三十錢●桐油七圓八十錢●荏油十四圓也●地水九圓十錢●久ト九圓九十錢●井桁九圓八十錢●星印十圓也●一川九圓九十五錢●坂箱九圓九十錢●伊勢箱十圓〇三錢●入山十圓也●チヤスタ一圓八十六錢七錢●タンク一圓八十七圓●ホーキ一圓十六錢七錢

雜録

白薔薇

錦綱女譯

ボストンとオウエンチスターとの中間の鐵道通路なるオルバ子の高燥なる土地に構造美を極めて壯麗なる一群の人家あり。此市街たるや華麗なる木と艶美なる別莊とを以て裝はれたる湖水に臨りて屈曲し、輝く水面の彼岸には、青みわたれる芝生も春めきてのどけく、いと廣き庭園には色々の草木生ひ茂りて四方の國より移し植ゑたる花の名も知れぬが、波をいろどりたる花艶うるはしく恰も伊太利のカムの海岸とまがひて美景一しほなり。オエブン河畔の百合、新英蘭の野草、夏猶萎れぬ花のさきて春には菫菜、白頭翁の互にその美を競ふあり。やがてその花の散るや、紫色なる翠菊と燦爛たる麒麟草とは、誇り顔にも秋の景色の賑はしかりけり。あはれ冬天の白雪、決してこの美景を奪はざるなり。

花鳥風月何ぞその景の富めるや。實に數年間葡萄園を耕し、草木を植ゑ、麗はしき邸宅を搆ひし主人が自ら曰く『魂よ、汝は長き年月善を積みたれば、今は休み飮

食して樂めよ』と、即ちこの蓊欝たる木蔭にこの美麗なる草間に、嗜好おのれが心に任せて道路を造り、春やこゝより萌えんと思はるゝ芝生ひろ〴〵として、この巨大なる樂園を受嗣ぐべき獨り息子と共に快しく餘命を幾日月の間に過しけり。

花には風月には雲のたとひはあるものを、まことや盈れば缺くる世のならひ、不幸にも寶と恃みし獨子が不治の病に襲はれて病床にあること僅かに週日、醫藥も効なく惜めども返らず、遂に果敢なくも彼の世の人とはなりけり。あはれ法律家として評判高く、別天樂土の主有者として好運なりし活氣の人もさすがに今は打ち萎れて、朝には草の葉におく白露を、ふきしく風も怨めしく、夕には　月影を掩ふ雲もつらくて、ひたすら愛子の失せにしを思ひいだして、爲に涙のひまなかりけり。乘て抱きし望と富とは彼が生命の糧なりしが、あはれやその身躰と共に、土塊の下に葬られたり。

此日より草木は物云ひ少き花も語るが如く、かの永眠の愛兒を弔ふに似たり。

斯くて肅たる沈靜の中より岩間をはしる泉の音の如き清くすゞしくして、彼が精神を激せし聲あり『余は汝になさしむる他の働きあり、汝に與へし寶をして多くの子女のために用ゐよ、此罪ある世よりして多くの人を救ひよ、美はしき果を結ばしめんと汝の愛兒に望みし如く荒蕪なる土地に夥多の花を開かしめよ、余獨子を賜ふほどに世を愛せしにあらずや』、彼答へて『我此に在り我をつかはしたまへ』と、これよりみぞれふる冬の嚴寒も厭はず、草葉しなえる夏の炎熱も恐れず、郡國鄕里を遊歷し、淑德貞貞の聞えある縉紳貴女には、洽く高説を叩きて志望をかため、以て青年諸子の高等敎育を企てたり。風雨の旅行困遇六星霜の遂に彼の事業は決定せられたり。千八百七十二年、キリスト敎主義を以て、完全なる敎育を女子に施さんがため、『オヱス

レー大學の基礎全くなれり。其校舎の築造また甚だ莊宏なり。

「オエスレー大學創立者の言に曰く「男子の意思を定め其性質を形造るに於て最も勢力あるものは婦人なり、故に余三百人の女子を入るゝに足る一大學校を興さん」と、彼が友は其熱心を見て大に笑へる事あり。その笑へる友の思ひらく、三百の女子大學に入らんとするには、幾多長年月を要すべしと、然れども彼は毫も疑はずして曰く、「オエスレー大學」に於ては、眞の婦人を養成せしむるに、尤も主要なるものを授くべし。家政は固より拉丁、希臘語と同じく重んぜざるべからず。されど風姿氣韻また高尚にして婦人らしく、クリスチヤンたるの女子を輩出する目的を以てせしに、同謀者さへ頭を搖りて、其計畫の實行し難きを怪しめり。

此の試の年に於て、オエスレー大學の塔は、小丘の頂に高く聳え、木の間より其榮譽を顯はせり。此處より遙か西の州に、一人の婦人あり。深く學を好み刻苦勉勵して、知らず〳〵大事業の豫備をなせり。あゝまた天なる哉。

アレス、イ、フレーメアン孃は、紐育ブルーム縣「カレズウエル」に生れ、父をゼームス母をエリザベツと呼べり。四人の兄弟ありしが、孃はその姉たり。父は甚だ學を好みて、その末子を設けし後、孃より僅に十七才多き母に家事を托し、隣市に行きて醫學を研究せり。是を以てフレーメアン孃は、熱心にして學ありし人の娘たりしを知るべきなり。

フレーメアン孃幼なりし時父は、「サスクエハンナ」に沿へる「オエンドソル」と云へる小村に移りし事あり。この地や天然の美景、眞に孃が品性を養へり。若きより弟妹とうちつれたちつゝ、野に行きてはうるはしき花を見、天地の眞美を敎へたり。是ぞ彼の女が草木を愛し、夕陽を慕ひし熱情の秘密ならめ。六才の時三人

の弟妹を伴ひて牧場に至り、道端の芒ある堤に坐り、覺えず眠を催しゝ事あり。目覺めて大に驚き、急ぎて母の許に至り、以て不實の罪を謝したり。そは孃が眠りし間に、若しや惡漢の襲ひ來りて、わが弟妹を奪ひ去らんかと、今より顧みて恐るゝなりと。噫孃が性の柔しき、幼より斯の如く務めて己が責任を盡せり。

此樂しき村に幸なる幼時を過し、玆に中學に入て業を修め、夫より大學にて益學を研かんと企てたり。時恰もよしミシガン大學にて女子の入學を許しゝかば、意を決して玆に入り、遂に勇敢なる教育者の先驅となれり。大學にあること四年、此間孃が眞實敦厚なる性、自らを重ずる念、忠實熱心なるキリスト教信仰の精神は、以て無慮の勢力を有せり。千八百七十六年、遂に卒業の榮を得。止まりて教ゆること三年にして、オエスレー大學校より招聘せられたり。孃の成功甚だ著しく、僅か二十四才の妙齡なりしが、該大學の創立者履く語りて曰けらく『玆にオエスレー大學の未來の總理あり』と。

千八百八十年、創立者「ヘンレー、エフ、ドーレアント」死去し、校長も病を以て辭したり。此急迫の秋に當り、暫く其職をフレーメアン孃に任せられたり。他に此隆盛なる大學の頭となり、正しく管理する婦人なきは、多くの人に因て先見されし所たり。

此任にありし事一年、諸務を處理する甚だ機敏、尤も此職に適せしを以て、遂には該大學の校長に推擧せられたり。然れども玆に疑問なりしは、孃が年若く身躰柔弱なりしを以て、此大任の果されざらんかとの事なりき、主任を帶びし事六年、勇敢にして謙遜なる性質と、事に處する聰明なる能力とは著しく顯はれ、諸生をして高尙なる淸き道に導き、大に感化を與へたり。眞に至誠の人にして宗教心に富み、且つ淑德なる婦人にてありき。其人品と風采とは、人心を風靡せしむる

に足れり。生徒が嬢を以て同情に富める彼等の親友とし、幽欝の時には常に來りて慰籍を求めたり。彼が鋭き洞察は。諸生の過失を摘發すること甚だ速に、其機智と同情とは、亦彼等を救助するに適したりき。

フレーメアン嬢校長となりしより、生徒の數大に增し、四ツの大なる講堂と二棟の學舍とを增築せり。而して學校に接近せる家屋は、概ね學生を以て充たせり。其數千人の多きに至れり。現時入學を望むもの甚だ多し。

フレーメアン嬢、身躰薄弱なりしにも拘らず、大事業を成就せしは、專ら耐忍の力に因れり。常に己が信ずる主義を實行せんと務めたるや著るし。今左に諸生に語りし重なるものを示さん。

神は其聖書のまゝに汝を造り、適當の働きを與へ、善き果を結ばしめんとし給へり。而して神は汝に働くべき機會を賜ふべし。苟くも其聖書に違ふべからず。常にこの事を記憶せざるべからず。神に於ては決して誤りなきものなり。

多年嬢と知りし人の評に曰く、最も敬服すべきは同情の念深く、敦厚にして熱心、進んで教育を受けし事なり。殊に純潔と嚴肅との湧き出づる美はしき慈愛には猶一層嬢を歎賞するなりと。

嬢が嘗て教育せられしミシガン大學の校長が、其事業を賞して哲學博士の尊稱を與へられたり。またコロンビア大學校の五十年期に當り學者として教育家として、名譽高きかどを以て、文學博士の號を贈らるゝに至れり。嬢の榮譽、また何によりてたとへん。

蒲生氏鄉

（口繪の繪解き）

豐臣秀吉の蒲生氏鄉及び木村秀俊を陸奥に封ずるや、

戒めて曰く、卿等今より封を遠國に請け、共に親しむものあるまじ。陸奥の地人心未だ測られざれば、宜しく兄弟の誼を結びて緩急相救ふべしと。二人封に就く。秀俊部下の民亂を起し、秀俊孤城を苦守す。氏郷乃ち之を救はんとせしに、人其時方に寒ふして積雪路を塞ぎ、事利あるべからず、且つ其伊達氏の煽動によりて起りしを以て、之に備へざるべからざるを諫む。氏郷言ふ、これをしも救はずんば何を以て大閤の附托に答へん。況や彼の我に兄事するをや。其弟死地に陥りて寧ろ之を救はざるの理あらんやと。直ちに兵を率て亂を平げ、秀俊を救へり。其軍機の敏なる、伊達氏も遂に動く能はざりき。是に於て乎、彼が義名大に揚りぬ。



時事一斑

博覽會

博覽會は四月一日を以て京都に開かるべし。亦以て國光を觀めすに足る乎。

國民教育

蘇峯生「國民之友」に於て「征淸の大役と國民教育」を論じて曰く、

征淸の大役は、世界に向て、一の眞理を發揮したり。何ぞや眞理とは、曰く國民教育の効力なり。從て一の教訓を世界に與へたり。曰く國家の隆盛を謀らば、先づ力を國民教育に竭さゞるべからずと。

世界に於ける日本の位置をして、積極的、進取的、膨脹的ならしめざるべからざるは、蓋し維新中興の大目的にあらずや。立國の大本、既に此に存せば、教育の大主腦、亦斷じて此に存せざるべからざるや論なきのみ。

(第一)武備的教育　武育の要は、人の體力を强健ならしむるのみならす、亦人に精神的磨勵を與ふるに在り。凡そ人の紀律を守る事、規則正しき事、活潑なる事、剛勇なる事、磊落なる事、快活なる事、危を見て怖れさる事、困厄に際して堪忍なる事、皆武育の効果にあらさるはなし。

(第二)職業的教育　職業教育の要は、文明の實學を普及せしむるにあり。

勤儉の念は、職業の念と伴生す。

職業教育は人に一種の修練を與ふ。即ち人の注意を周到ならしむる事、

觀察眼を機敏ならしむる事、精細ならしむる事、謹愼ならしむる事、勉勵ならしむる事、肉慾の外に快樂を與ふる事、克己せしむる事、事物の關係を察する事、因果の理に安着せしむる事。

(第三)市民的教育　市民的教育の要は、國民をして、一方に於ては自治的精神を發揮せしめ、他方に於ては公共心を育成せしめ、而して此と共に公共事業に盡瘁するの志望と、能力とを開發せしむる事。

實業教育の效果

實業教育の既往は如何なる効果を得たる？

東京工業學校卒業生就業表

	化學工藝部	機械工藝部	計
官吏	二八	五六	八四
私立工場にある者	二七	九七	一二四
教師	二四	二五	四九
自營	三九	七	四六
海外留學	〇	四	四
專攻科生	一	〇	一
兵役	一四	三三	四七
未定	八	一七	二五
死亡	四	三	七
合計	一四五	二四二	三八七

高等商業學校卒業生就業表

	本科	主計學校	計
官吏	四〇	七三	一一三
會社	一一一	四九	一六〇
銀行	三〇	三九	六九
取引所	七	一	八
商店	一五	八	二三
專門學校	四〇	二	四二
普通學校	七	〇	七
自家營業	三五	一九	五四
海外留學	二	二	四
兵役	八	七	一五
未就業	一九	九	二八
不詳	一五	一八	三三
死亡	二四	一三	三七
合計	三五三	二四〇	五九三

科學界の勇將

科學界の勇將野中至氏寒中一萬二千尺の山頂に攀ぢて富士山上に高山氣象臺の設置を企つ。嚮に吾妻山に入りたる三浦技師あり。香港の瘴癘窟を探りし北里青山二博士以下あり。事業に難易なからず、功果に大小なからずと雖、其職に忠なるは一なり。

中央看護婦會

看護婦を要する時代大に至れること久し。府下本郷元町二丁目中央看護婦會は、本月十五日始業すべく第二期生徒を募集し居れり。應募者の資格は滿十六歲以上三十五歲以下にして尋常小學卒業相當の學力あり、且つ三年間家事に關係なきもの。講習期は六ケ月なり。

軍夫の貯蓄心

日清開戰以來、軍夫より野戰郵便爲替に由て在本邦家族に送り越したる金額、實に六十萬餘圓に達し、爲に係り官吏は非常に多忙なりしと。軍夫必ずしも貯蓄心なからず。

戰爭後の軍夫

戰爭後に於ける軍夫を如何にすべきか。是れ濟世家が差當り大問題とする所。

説をなすものあり、曰く。戰亂收まりて十數萬の從軍人夫一時に歸朝するも、彼等は殆んど爲すべき事業なきに苦しむべく、殊に彼等が戰地にて生命を賭して多分の賃銀を得たる慣習は、俄かに生産業に從事するに堪へざるべし。幸ひに盛京山東の諸省と臺灣地方に新版圖の開くるあらば、此等勞働者を移すには適當なるべきも、其の勞働に對する賃銀にして十分なるを得ずんば、彼等は容易に喜んで行くことを肯んぜざるべし。故に今日の計は海外に於て確實なる事業の受負を爲すにあり。即ち西比利亞鐵道尼迦拉瓦運河パナマ運河の如き大工事は、今後我が勇猛なる勞働者を移し、軍事に於て世界の喝采を博したる我國民は、更に工事によりて世界の喝采を博することを得べし。

二月將軍

二月將軍が如何に其寒威を逞ふして我が遠征軍に迫りたりしかは、松原岩五郎氏が國民新聞に送りたる通信を見ても著けし。其二月一日の記事に、

今朝師團の炊事場より貰ひ來りし飯は街道僅か三丁程を歩み來る間に器中（勿論器は陶器なれども）の飯粒悉く凍結して石の如く成り到底其儘食すべからざりしを以て止むなく家内の支那人を頼み釜に容れて蒸さしめたり

湖北の暴寒が食物に對する斯の一騒動一座の同僚悉く荒肝を拔かれ、扨てこそ今日は隨一の寒さならめと驚く者あると同時に氣の附きしは室内の光景なり昨日迄も今朝迄も何ともなかりし壁の一面は室内の水蒸氣一夜の内に凍結して黝然として常に燻りたる壁俄然として眞白くなりしを見る茲に於て一同舌を捲き櫻田大我氏先づ立て寒暖計を試みんとして戸外に出でしが忽ちにして水銀は凍結して用をなさゞりし而已ならず今朝食事の際支那人より貰ひし菜漬の一ト株は湯熟を以て洗ひ清め是を爼板に上せて斬る間に凍結して遂に刄立たずなりぬ人夫の一人は今朝門を開かんとして誤りて鐵環を手に觸れ慌忙てゝ手を引き込みし際指頭を擦り剝ぎて血を流したり（極寒の日鐵に手を觸れば附着して負傷す恰も平日燒火箸を握るに異ならず）

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舎印行